

都鄙のあいなか 中世の京都をめぐる

鋤柄俊夫

Between Urban and Rural Communities: Centering around Kyoto in the Middle Ages

はじめに

- ①都市の風景
 - ②都市の風貌
- おわりに

【論文要旨】

中世における都市遺跡研究のひとつのテーマは、遺構と遺物によって再構成される遺跡の空間構造から、各時代における社会の仕組みとその変化過程を説明するところにある。これまで京都の考古学資料は、その量が多岐にわたったために、筆者を含めて、ヴァーチアルな総体としての京都の検討はなかなか進んでこなかったものの、遺跡の空間構造を復原するために必要な、調査地点個々の特徴は、ほとんど検討される機会がなかった。そこで小論ではこの点に注目して、中世の京都においてどのような遺構や遺物が、いつの時代に、どの場所から検出され、それらは京都全体の中でどのような意味をもつことになるのかを問題の所在とし、一般に京都系「かわらけ」と呼ばれている京都型の土師器皿に注目し、その伝播の背景を考えると、中世都市京都が持っていた強い影響力の一端の復原を第①章とし、第②章で中世の京都の中で、おおむね三条以南に焦点をあて、都市の様々な場が果たした役割の意味を、空間

構造の視点から考えてみた。

その結果第①章では、土師器皿の一方で西日本に伝播した瓦器碗の背景が石清水八幡宮と宇佐宮弥勒寺の関係によって説明できる可能性を踏まえ、中世前期の東日本に伝播した京都型土師器皿の背景を日吉山王宮と白山社の中で考え、第②章では京都駅周辺地域の詳細な調査地点分析によって、当時の政治の中心であった武家と八条女院および東寺を背景とした七条町の再評価をおこない、さらに下京に多く見られる石鍋の分布から東福寺の影響力の強さについても検討をおこなった。

中世の京都がもっていた多様な側面を、下京を対象に京都以外の地域との関係の中から逆に浮かび上がらせることにより、中世都市京都の特質の一端としての京都と京都以外の地域を結びつけていた宗教的側面または神社の果たしていた役割の大きさをあらためて確認することができたと考える。

はじめに

中世における都市遺跡研究のひとつのテーマは、遺構と遺物によって再構成される遺跡の空間構造から、各時代における社会の仕組みとその変化過程を説明するところにある。それではそのような考古学の資料によって描き出しうる都市の構造とはいったいどのようなものだろうか。

この点については、都市の文化というものが、都市民のそれぞれ異なった帰属関係や習慣などの集合したものであるとして、鎌倉での都市研究を前提にかつてそのモデル的な研究を、大坂城下町における都市の中心と周縁に注目する形で提示したことがある¹⁾。考古学は、極端な例をあげれば家毎に異なった出土状況を示す様々な資料を検討することによって、このような分野に対し、重要な役割を果たすことができるからである。

それでは京都はどうだろうか。ところで都市の文化の一端は、『海東諸国紀』にみられる外食などのように、消費の文化であるとも言い換えることが可能と考える。そこで中世の京都についてみると、その消費者（商人も含めて）である都市民たちは、近世の京都と最も大きな違いとしてよく言われているように、寺社・公家・武家をはじめとする重層的な権利関係の中にあつたことが特徴とされている。従って、これらの手にした様々な消費財も、当然その流通の経路は重層的な権利関係の下にあつたと考えられることになる。

これまで京都の考古学資料は、その量があまりに膨大であつたために、筆者を含めて、調査地点個々の特徴よりも、ヴァーチャルな総体としての京都の検討が主に進められてきていた。そのため、ある特定の遺物や遺構が京都のどこかで発見されている情報は整理されていても、その同種の遺構や遺物が京都のどこでもみつかるのか、あるいはどこかに偏る

のかといった点などは、検討する機会がほとんどたれなかつた²⁾。

しかし京都の中で、たとえばある調査地点の任意の遺構から様々な遺物が出土した場合、それにかかわつた流通の担い手は、本来その帰属関係も含めて多様だったのであり、それは調査地点を異なることにより、さらに複雑さを増す。したがって、鎌倉や大坂での検討と同様に、やはり中世都市京都の特質を復原するためには、最終景観としての発掘成果の裏で、それらがどのような相対的な社会力学の関係にあつたのかを説明しなければならぬのである。

そこで小論ではそのひとつのテーマとして、中世の京都においてどのような遺構や遺物が、いつの時代に、どの場所から検出されており、それらは京都全体の中でどのような意味をもつことになるのかについて、一九九五年よりおこなわれている平安京・京都研究会の成果を踏まえながら、発掘調査が進む京都駅周辺地区を中心とした下京の中世に注目してみたいと考える。

ところで都市史の中から京都を見たとき、山田邦和氏による「巨大都市コンプレックス」という視点が現在最も注目されている³⁾。従来よりある平安京との地割の関係や、洛中洛外という捉えかたを含みつつも、京都への強い収斂性によって京都の中核部分とその周辺世界を関連づけ、それによって京都の中世の都市の姿を示した表現である。

一方都市・町・村などをあわせた中世の地域社会を研究の対象としている筆者にとつて、それらの共同体は、すべて相対的な社会力学で説明される存在であつて、たとえ京都であっても、卓越はともかく超越はしないものと考えている。地域においてそれぞれの都市・町・村などは、それぞれにとつて必要な役割を果たす事によって、常にある一定時間均衡状態が維持され、その関係が、内的あるいは外的な要因によって破壊をきたしたとき、また新たな秩序を求めて動きが生じ、それが景観としての都市・町・村にも表れるのではないかと考えられるからである⁴⁾。

それ故、京都盆地を対象とした山田氏の説明に従えば、そこに京都を中心とした「巨大都市コンプレックス」というものが形成されているようにも見えるが、実はこの種の関係は中世の日本列島のすべての地域をおおっているものと考えられるため、原理的に、その相対的な力学関係は、この範囲の中だけでおさまるものではなく、その結果「巨大都市コンプレックス」というものは、実態としてはその一部の現象を表現しているものである、といった言い方になるものとも考えられる。

ただ、京都の「巨大都市コンプレックス」が無限に拡大するのでは、といったような疑問に対しては、考古学の立場では比較的その境界を設定することは難しくなく、たとえば京都に特徴的な土器を基準とするならば、それで京都の意味での範囲を規定することは可能である。もつともその場合、後で述べるように、少なくとも石清水は京都ではないことにもなるが。

図1 「巨大都市複合体」としての中世京都 (山田邦和、註3)

もとより筆者も京都の持つ強い求心力を否定するものではなく、根底にある視点として、地域における都市・町・村などをこれまでのように分解して、例えば現象面だけをとりあげて分類にあてはめるのではなく、相互の関係の中でとらえ直すという考え方は山田氏と全く一致するものであり、その点で「巨大都市コンプレックス」より派生するであろう今後の研究の展開は、非常に興味深いところである。中世において京都が果たした役割の大きさをあらためて認識させ、それによって中世京都の特質を説明する契機をつくりだすものとなった「巨大都市コンプレックス」は、その意味で非常に重要な表現と言える。

中世の京都は、中世社会の中で卓越的に大きな役割を果たし、それは周辺の町や村ばかりではなく、ひろく日本列島に大きな影響を及ぼしたのである。しかし、それではそれが具体的にどのような役割であり、なにがその原動力となっていたのかについては、詳しく検討されている部分は、とくに考古学の分野では多くない。

その点で先に少し触れた、京都で特徴的な土器の皿は、まさに京都を起点として広く中世の日本列島に影響を及ぼした考古資料である。それ故、「巨大都市コンプレックス」とどのように対置しうるのかはわからないが、中世社会に卓越した役割を果たした京都の意味とその原動力の一端は、この皿によって説明できる可能性がある。

小論はこれらの問題提起により、第①章では一般に京都系「かわらけ」と呼ばれている京都型の土器器皿に注目し、その伝播の背景を考えるとところから、中世都市京都が持っていた強い影響力の一端を復原し、それを前提として第②章では中世の京都の中でも、おおむね三条以南に焦点をあて、都市の様々な場が果たした役割の意味を、空間構造の視点から検討してみたいと考えている。

ところで、先に触れたように土器によって京都の範囲を規定することができるのであれば、その最も代表的な資料が京都市内から出土する土師

前に、逆にこの京都に受け入れられなかった土器碗の意味について考えるところからはじめてみたいと思う。

①都市の風景

1 石清水八幡宮——瓦器碗——

(1) 薪遺跡の調査

一九九九年十一月、京都府京田辺市に所在する薪遺跡で発掘調査の現地説明会がおこなわれた⁶⁾。発見された主要な遺構と遺物は、方形の池と井戸および礎石建物などであり、とくに池からはほとんど未使用と思われる大量の完形の土師器皿が、一括で廃棄された状況で出土した。中世前期のおそらく一般の在地の館と思われる遺跡で、方形の池をもった例は知られておらず、しかもその池からまさに儀式の痕跡を示す形で土器類が発見されたのである。これまで中世の考古学は土器に代表される遺物の編年研究が中心に行われてきたが、近年はその用途と機能に遡った意味論が求められてきている。その点で今回の調査成果は、その一端を説明する具体例になる可能性が高いものであるが、そればかりではなく、この遺跡は、後で述べるように、淀川を經由してひろく中世の西日本全体に関わる、もうひとつの問題について説明を可能とするかもしれない要素ももっているのである。

さてこの遺跡の所在する薪地区は、中世において、石清水八幡宮領の莊園で薪園と呼ばれている地域であった。範囲は近世の薪村から推定して東が天津神川、南が河内街道、北西を興福寺領の大住と接するとされている。地形的にみると、西南は甘南備山を中心とする山地であり、対する北東部は甘南備山を源流とする手原川によって形成された扇状地形の平野を呈し、あるいはその旧流路と思われる痕跡が、この河川と並行

器皿であるが、八幡市がその範疇に含まれないと言ったように、京都市内から出土する土師器皿と異なった土器がその遺跡の中心を担っている地域が実は京都の西方の隣接地にある。おおむね男山丘陵を境として西および南の地域では、京都に似た土師器皿もみられるが、出土する土器の主体は瓦質に焼かれた土器の碗であり、それはまた逆に京都市内ではあまりみられない資料なのもある。そしてこの土器の碗は中世前半において中国・四国から九州では土師器皿よりも通有な考古資料とみられているのである。それではこのように京都型土師器皿の一方で西日本に広く普及した土器碗が、なぜ京都で用いられなかったのか。そこにも京都の文化を復原する手がかりがあるのではないだろうか(図2)。

そこで第①章では、直接京都の特徴を示す土師器皿の検討をおこなう

図2 中世都市京都と瓦器碗の関係

するかまたは放射状にはしる道によって知られる(図3)。

したがってこの地区は、地形的にみて甘南備山への玄関口にあたり、さらにその山地には堀切古墳群をはじめとする南山城でも有数の古墳群が集中するなど、古代より重要な地区であったことは明らかであり、一方それを見おろす平野部には、奈良街道と木津川が接近してはしっているため、当時の景観との厳密な検証はできていないが、交通の要衝であったこともうかがうことができる。

なお現在の集落は、この扇頂部の周辺と天理山古墳群などの立地する平野部の南縁に沿って集中している。この立地がどのくらい遡るかはわからないが、水源地に近い高台を居住域としてその前面に生産の場をもったその配置は、あたかも和泉国日根荘の絵図に描かれた中世的とも言える景観を示していると言えよう。

さて、このように現在は一見南山城の片田舎にみえる薪地区であるが、

図3 薪遺跡の位置 (1:50,000)

中世においては朝廷と幕府を巻き込んだ境・用水相論などの大きな事件の舞台として記録に有名な地であった。以下そのあらすじを黒田俊雄氏の研究から辿ってみよう。⁷⁾

大住荘の立荘は大治四年(一一二九)まで、薪荘の立荘は保元三年(一一五八)まで遡ることが知られているが、石清水所司等の解状によれば、薪荘は神楽療料を備進する藪として設定され、住民の内の若干の者は神人身分を与えられ、薪を刈っていたと考えられている。

そんな中、大治四年(一一二九)に興福寺領大住荘内にあった石清水八幡宮領の橘藪の神人と大住荘の代官との衝突があり、文治元年(一一八五)には大住の住人が石清水神人に刃傷をおよぼし、正治年間(一一九九～一二〇一)には荘境の実検帳がつくられている。最も大きな事件は嘉禎元年(一二二五)からほぼ一年半にわたって断続しておこった。きっかけはその年の五月以前に薪荘住民が大住の荘民を用水相論でうしろしたものとされているが、それを受けて翌六月には興福寺衆徒が薪を攻め、在家六〇余宇を焼き、神人二人を殺害したとされる。したがってこのとき薪にはすでに六〇以上の在家があり、その代表として神人が存在していたことになる。その後、弘安四年(一二八二)まで断続的に続くこれらの薪と大住の境相論の原因については、その実態がかならずしも用水の問題のみにとどまらず、大住の住人である宗知という人物の存在そのものに深く関わっていることも指摘されているが、それと共に重要な前提としておかなければならないのが、薪荘が石清水八幡宮とさきわめて強い利害関係のあった地であり、その代表が神人であったという点である。

なおその後この地には、正応年間(一二八八～九三)に大応国師南浦紹明が訪れ妙勝寺を建立し、元弘の乱(一二三三)で兵火に遭って荒廢するものの、一休宗純が永享頃に(一二二九～四一)復興を志して自らの退隠所として酬恩庵(一休寺)となし、現在にいたっている。

さて、文献資料が示す新遺跡のこのような変遷に対して、今回の発掘調査の成果はどのように関係してくるのであろうか。詳細な分析は今後も続けられるため、ここではあくまでも現時点での私見を述べるにすぎないが、まず方形の池についてみれば、一般の屋敷ではみられず、絵図には神社にともなうものとして描かれる場合が多い⁽⁸⁾。しかしこの遺跡ではこの池と関わる形での瓦の出土がないため、そのままこの遺跡を寺院とすることは難しい(図4)。

一方その点であらためて先の文献史研究の成果をふりかえれば、この地が石清水八幡宮の荘園であり、その代表は神人であったと指摘があった。荘園村落における神人の存在形態については、名主クラスといった

について検討する必要がある。

(2) 石清水八幡宮

i 八幡神勧請¹⁰⁾

石清水八幡宮は、南山城を流れる桂川・宇治川・木津川の合流点を見おろす、京都府八幡市の男山丘陵北端の峰に鎮座する。この地は京都と難波に加え、大和と丹波をむすぶ山陰道も通る水陸交通の要衝であるが、現在、一の鳥居は東麓の御幸道にあつて、その脇に下院と呼ばれる頓宮殿・極楽寺跡・高良神社がおかれ、二の鳥居から三の鳥居までの間に護国寺跡や泉坊などの多数の坊舎の跡が存在している。

図4 新遺跡遺構配置図 (京田辺市教育委員会 2000『新遺跡発掘調査概報』)

見方以外にも議論の多いところではあるが、網野善彦氏は、神人の実態として大住の八幡神人の「沙汰者」と呼ばれた交野右馬允宗成について在地領主的な存在であったとみている⁽⁹⁾。これに対して、現在の集落内ではみだれて確認できないが、一休寺の北を東西にはしる道は、この遺跡周辺だけ南へ拡張して条里地割と対応し、さらにこの地区はまわりの集落から一段高い位置に立地している。したがって、この遺跡は、地域内で最も高い階層の館であったと考えられ、その結果この遺跡(屋敷)の住人は、新荘を代表する石清水神人であった可能性が高いのである。中世における神人の存在を宗教性となげて考える必要はないともされるが、一方で土器の一括廃棄は必ずしも池に限られるわけではなく、そんな中、本遺跡の場合はあえて方形の池を選んでいるわけであり、その意味でこの遺跡の状況は、後に述べるような寺院主導であった石清水八幡宮のなんらかの宗教儀礼と関わっていたことも視野に入れて考えてみることができるのではないだろうか。石清水八幡宮とその遺跡

さて『護国寺略記』によれば、その創建は大安寺の僧であった行教が貞観元年（八五九）に大分の宇佐宮へ参拝した際、八幡大菩薩からの託宣を受けたことによるとされるが、宇佐宮大宮司であった大神氏および和気氏のはたらきかけによるとも言われ、また、天安二年（八五八）に宇佐宮に勅使派遣の清和天皇の宣旨がだされ、その勅使として行教が選ばれ、同時に宇佐の弥勒寺で一切経の書写も開始されており、実際は幼帝清和天皇の即位を期に、国家鎮護のために貞観元年（八五九）に摂政となった藤原良房らによって八幡神を都に勧請することが計画され、平安京造営に際しても重要な役割を果たした紀氏一族の行教はその実行者として選ばれたものとも考えられている。

なお八幡宮が勧請される以前にこの地には石清水寺と称される寺があり、これが護国寺に改称されたと言われる。そのため宮寺（みやてら）と呼ばれる本宮は、いわゆる神宮寺であるが、神社に寺が付属するのはなく、行教が神を勧請したように、その主導権は神宮寺である護国寺およびその僧にあつて、その下で鎮護国家の神として天慶二年（九三九）には伊勢に次ぐ第二の格を与えられることになる。

その後長和三年（一〇一四）には宇佐八幡宮寺の弥勒寺講師元命が石清水の別当に就き、その権勢を九州までのばす一方、源頼信が永承元年（一一四一）に菅田八幡に祭文を捧げて家門の繁栄を祈って以来、八幡神は源氏の氏神ともされ、康平六年（一一六三）には東国の相模国由比郷に勧請される。

さらに白河天皇は仏教に熱心で毎年三月には石清水へ行幸をおこない、天永三年（一一一二）には大塔が、大治三年（一一二八）には経蔵が建てられ、鳥羽天皇の外戚となり、天承元年（一一三一）に権大僧都に補された檢校光清とその孫の慶清の時代には、九州の弥勒寺・竈門神社・大隅正八幡宮も管掌下におき、さらに宮寺領は三三三〇〇個所、極楽寺領が一五三七個所を数えるなど全盛期を迎えている。なお鎌倉時代

以降も時の権力者と密接な関係を維持するが、この時期以降は、山崎の離宮八幡に拠点をおいた大山崎の油神人に代表される神人の活躍もこの宮寺を語る上での大きな特徴となっている。

一〇世紀中頃から中央政界での影響力を確立し、とくに十一世紀以降は神人の活躍とあわせて、ひろく西日本に大きな影響力を及ぼした一大勢力であったとすることができよう。それではこのような石清水八幡宮の周辺では、これまでどのような考古資料が知られているのだろうか。

ii 八幡市の遺跡と遺物（図5）

八幡市の男山丘陵周辺の遺跡は、これまで史跡松花堂およびその跡整備委員会と八幡市教育委員会によって調査がおこなわれてきた。以下そ

図5 男山丘陵周辺の遺跡（1：50,000）

1. 史跡松花堂
2. 平野山瓦窯跡
3. 西山廃寺跡
4. 奥野町遺跡
5. 今里遺跡
6. 山本町遺跡
7. 志水廃寺跡
8. 石清水八幡宮

図6 八幡市内遺跡の出土遺物

の主な調査成果を紹介する(図6)。

1~11は石清水境内の史跡松花堂地点出土の資料である。調査位置は、石清水八幡宮の社殿から真東の丘陵中腹にあたり、一部岩盤を削りだす形で形成された幅二〇~三〇mほどの五つの平坦面から、近世の泉坊松花堂にかかわる露地遺構や井戸などが発見された。なおこの調査は、松花堂の近世遺構の検出を目的としたため、中世以前の状況を示す資料は遺物にのみ限られる。

1~9は土師器皿、10は瓦器碗、11は中国製の青磁蓮弁文碗である。時期的には、1・4・10・11が十三世紀代あるいは十四世紀前半、6・8が十五世紀後半から十六世紀はじめ頃に比定されるものと考えられる。

23~26は平野山瓦窯跡出土資料である。⁽¹²⁾当遺跡は、男山丘陵の西縁部に位置する七世紀代を中心とした瓦窯であるが、このうちの四号窯内の、床面から遊離する形で九世紀後半から一〇世紀はじめの土師器類が出土している。

12~22は西山廢寺跡出土資料である。この遺跡は道鏡によって流刑となった和氣清麿が、八幡神の加護によってたすけられたという伝説を持つ足立寺に比定されているが、中世の包含層から十三世紀代を中心とする瓦器碗・土師器皿および土釜・鍋類が出土している。なお22は大和で十五世紀代に出土する資料に類似している。

27~38は奥ノ町遺跡出土資料である。⁽¹³⁾当遺跡は淀川に面した男山丘陵の北側に位置し、「行基年譜」・「天平十三記」にみえ、延暦十三年(七八四)の記事で知られる山崎橋の推定地にも近く、この遺跡周辺が中世においても交通の要衝であったことがうかがわれる。

出土した遺物は、十四～十六世紀代を中心としており、多量の備前窯播鉢と土師器皿がみられる。このうち土師器皿は、口縁端部につまみあげを持った丸底の小皿を指標として十六世紀前半代の資料も多いが、部下半に丸みをもち、口縁部が外反する形態の特徴をもつものおよび、底部を上方に押し上げたいわゆるへそ皿も目立つ。これらの特徴は京都市内の土師器皿と対比すると、十五世紀代に比定されることになるが、この遺跡の資料は、皿の内面に刷毛調整を施すことで異なった特徴をもつ。なおこれらの特徴は堺環濠都市・一乗谷朝倉氏遺跡で知られている。

またへそ皿についても、口縁部のつまみ上げが京都市内の出土資料より著しく厚くつくられており、そこに強い地域色をみることができ。

39～53と58～60は今里遺跡出土資料である。⁽¹⁴⁾遺跡は男山丘陵の東方約2kmに位置し、木津川氾濫原に形成された微高地上に立地する集落遺跡であろう。溝状のSX02などから十三・十四世紀代を中心とした遺物が出土している。内容は魚住窯捏鉢、瓦器火鉢、瓦器釜、瓦器足釜、瓦器碗、土師器小皿、青磁碗、石鍋および瓦などであり、この時期の畿内村落でみられる通有な器種構成を満たしている上に瓦が出土している点から、溝で囲まれた寺院の可能性も考えられる。

57は志水庵寺出土の瓦器碗である。昭和一〇年代の採集で時期は十三世紀代に比定される。⁽¹⁵⁾

54～56は石清水八幡宮出土の資料である。⁽¹⁶⁾昭和九年の室戸大風水害の直後に、八幡宮の本殿付近から土師器・瓦および陶磁器類が採集された中の一部である。55は糸切り成形で、56は瓦質に近い焼成と言う。時期の比定はできない。

なお遺跡番号の6は山本町遺跡である。⁽¹⁷⁾南北朝期に後村上天皇が陣をはった男山城の推定地とされているが、調査面積の関係などから、近世の遺構・遺物が調査されている。

以上、石清水八幡宮またはその時代に関わると思われる遺跡の調査成

果についてみてきた。資料が限られているため、なかでも最も重要な中世前半期の状況を整理する段階にいたっていないが、ひとつには、中世後半の土師器皿の特徴（へそ皿の口縁部形態・十五世紀代に比定される器高の高い皿の体部の傾きが急なこと・内面に刷毛調整を施すこと）から、京都ときわめて近接した地でありながら、この地が独特の文化をもっていた地域であるということは指摘できる。すでに藤原良章氏が指摘しているように、中世のかわらけについてはその宗教との関係が認められている中、⁽¹⁸⁾京都に近いこの地で、京都と印象の異なった土師器皿が使われていたことは、注意する必要がある。

その点で見逃すわけにいかないのが、この男山丘陵と瓦器碗との関係である。確かにこれまでの調査で瓦器碗と石清水八幡宮との関係を示す直接的な事例は得ることができなかった。しかしそれは本来瓦器碗が普及している平安時代後期から中世前半期の資料に恵まれなかったことが最も大きな原因なのであり、これらの資料によって石清水八幡宮と瓦器碗との関係を消極的にみる必要はない。むしろ瓦器碗の分布をマクロ的にみた場合、少なくとも、石清水八幡宮の鎮座する男山丘陵の西側で多くみられるのは瓦器碗であり、一方その東で多くみられるのは土師器皿なのである。

瓦器碗は良く知られているように、十一世紀のある段階に出現し、畿内では摂津・大和・河内・和泉を中心として、その周辺地域である丹波・伊賀・紀伊さらに近年では阿波の一部でも生産されていたのではないかと考えられている中世前半を代表する土製の小型容器である。既に指摘しているように、⁽¹⁹⁾中世前半の西日本の地域性は、とくにこの土器碗で語られることが多く、実際、北陸・中部・遠江東部以东の各地では平安時代後期以降土製の碗が見られなくなるのに対して、山茶碗の流通する東海以西の各地ではおおむね十四世紀代までは土師器・瓦器・須恵器などの焼成が異なり、また高台の有無などの器形の異なりもあるものの、

図7 12世紀における土器碗の地域性
(鋤柄、註19)

図8 北部九州の瓦器碗 (森、註27)

図9 宇佐宮と弥勒寺領荘園の分布
(大分県立歴史博物館 1998『常設展示
豊の国・おおいの歴史と文化』)

図10 北部九州の経塚分布 (註34)

土製の碗がみられ、その中心的な存在が瓦器碗と
言われている(図7)。

ところがこれまで瓦器碗の生産と流通については、「楠葉」御牧との関係で、橋本久氏などによる撰関家の先導による貢納生産を軸に考えられてきた²⁰。しかしそうであるならば、吉岡康暢氏が指摘しているように²¹、本来撰関家が本拠としたはずの平安時代末期の京都においてそれがなぜ中心的な位置を占めることにならなかったのでしょうか。これまで見逃されてきた重要な問題の一点がここにある。それは瓦器碗の東への分布域である伊賀や近江南部についても、それらが共に淀川の上流である木津川や宇治川の流域であることを考えれば、同じ説明ができることになる。

ところで、西日本でみられる土器碗のうちで、畿内以外にもう一個所だけ、土器を瓦質に焼いている地域がある。それが北部九州である。次項でその背景を検討してみたい。

(3) 宇佐八幡宮

i 北部九州の瓦器碗

北部九州の土器碗については、森田勉氏の先駆的な研究を緒に²²、森田勉・柴尾俊介・村上久和・小倉正五の各氏により北部九州全体の概観が示され²³、佐藤浩司氏・中島恒次郎氏²⁵などの成果をまとめた森隆氏による精緻な分布分析により²⁶、それらの出現時期はおおよそ十一世紀後半または末頃であり、十二世紀後半に飛躍的に増加し、十三世紀中頃までわずかながら続いていた

ものと考えられ、おおきく「筑紫型」「豊前型」「肥後型」「肥前南部型」に分類されるその分布範囲が、図のような北部九州一帯で示された(図8²⁷)。

ところで土器碗を含めて、瓦器碗が用いられたのはそれを使用しなければならなかった理由がなければならず、単に安価な日常品として入手できたからという理由では、西日本であってもそれらの見つかっていない地域との関係で、十分な説明にはならない。一方その点において、既に別稿でまとめたように⁽²⁸⁾、基本的に土器製品が別に存在したオリジナルの代替製品であることは、西日本の各地でみられる土器碗や、東日本で

図11 英彦山出土の土器

も見られる足高台皿や疑似高台皿が、素材や焼成さらには高台や底部の構造にこだわらず、そのシルエットを最も重視していることから知られる。

したがってその意味で言えば瓦器碗の出現は、焼成技法の変革期にはなりえても時代区分の指標とするにはまた別の手続きが必要であると言わざるをえないのであるが、重要な点は、土器碗のもっているこのような前提をふまえた時、土器碗の使用された目的のひとつを示す資料が、瓦器碗の源流であると大方の認める黒色土器B類碗に、しかも性格の特定できる遺跡でみられる点である。

遺跡は福岡県添田町に所在する英彦山修験道遺跡である。⁽²⁹⁾ 英彦山は、継体天皇二五年に中国の北魏の善正によって開かれたという伝承を持つ山岳宗教の山であり、寛治八年(一〇九四)の英彦山衆徒蜂起事件などにより、大規模な信仰集団のあったことが知られている。このうち英彦三山の中心である中岳の調査で、上宮社殿の建つ平坦地およびその南側急斜面から、投げ捨てられた遺物が散乱して発見され、その中から図11で示した土器および黒色土器が検出されたのである。なお1~8が南側急斜面からみつかった資料で、9~12が上宮の平坦地であり、11が黒色土器でその内面にはさらに漆が塗られている。時期は十一世紀に比定されている。

問題は9~12の碗にみられる底部と高台際の凸帯である。この資料は、これまでもいわゆる凸帯付きの碗として知られていたが、その実態としては、托付きの碗を模倣したものと考えられるものであり、そうであるならば、これらの土器類は言うまでもなく儀器であり、しかもそればかりでなく、この遺跡の場合ほとんど山岳宗教にかかわる儀式に使用されるために用いられたとすることができるとなるのである。

日本列島で唯一瓦器碗の分布を示すのは畿内と北部九州であるが、その北部九州の修験道の遺跡から瓦器碗の源流である黒色土器B類碗が、

宗教儀器として出土しているのである。これは何を意味するのであろうか。そこでこれを考える手がかりとして、次にもうひとつの特徴的な分布に注目してみたいと考える。

ii 宇佐と石清水の結合

さきに石清水八幡宮の変遷をみてきたが、その時に九州との関係に少し触れた。飯沼賢司氏の論攷をもとに、ここでそれを少し詳しく整理してみた³⁰⁾。

宇佐八幡宮より勧請された石清水八幡宮と最も密接な関係をもったのは宇佐八幡宮の神宮寺である弥勒寺であった。弥勒寺は「八幡宇佐宮御託宣集」などによると、神龜二年(七二五)に宇佐八幡の託宣によって宇佐盆地の東端にあたる菱形宮の東の日足林に建立されたとされる。その後天平一〇年(七三八)に前年の宣託により宇佐神宮境内に移して講

図12 宇佐八幡宮主要荘園分布の概要(参考)
(中野幡能 1967『八幡信仰史の研究』吉川弘文館)

堂および金堂を建て、宝龜一〇年(七七九)の梵鐘鑄造によって完成とされている。鎮護国家を奉じて神仏習合を代表した寺院であり、その後の宇佐宮の発展とともに勢力をのびすが、とくに平将門と藤原純友によっておこされた承平・天慶の乱を契機として、宇佐の宮司家出身の義海が天台座主の宣命を受け、また石清水八幡宮の第二検校も兼ねる中、石清水以下の十二社に追討依頼がなされるなど、宇佐と石清水を統合する環境が整い、その流れの中で、豊前の国府周辺にいた在地豪族出身の弥勒寺講師元命宇佐が最初に両者の結合を確立する。元命は藤原道長の援助を受け、長和三年(一〇一四)五月五日に石清水八幡宮の少別当より始めて、同年七月には権別当にのほり、治安三年(一〇二三)にはついに石清水に八幡を勧請した紀氏一族の子孫である定清を廢して、石清水八幡宮別当に就いている。宇佐八幡の弥勒寺は、これによって北部九州とさらに石清水八幡宮を掌握するのである。その後石清水の主導権は再び紀一族の系列にもどるのであるが、石清水と弥勒寺との関係が弱まることはなく、大治三年(一一二八)、石清水別当の光清は四度目の宇佐弥勒寺との統合をはかり、寛賢と宇佐大宮司が相論をしたのを契機に、弥勒寺検校として実質的に弥勒寺の支配権を掌握し、これによって「宇佐宮弥勒寺とその末宮やその荘園は、この段階で完全に石清水八幡の支配下に組み入れられ」、その結果「石清水八幡宮は、日本の寺社最大の権門として君臨することになる」とされている。

具体的な権力支配の点で十一世紀前半にさかのぼる石清水と弥勒寺との関係は、十一世紀後半の相互による権力移動の時期を経て十二世紀はじめには石清水側の掌握の形で完成するのである。

そして注目されるのが、そんな石清水と関係の深かった弥勒寺領の荘園分布がやはり北部九州に広がっており、それが先に述べた北部九州の瓦器碗の分布と重なっている点である(図9・12)。弥勒寺領荘園の動向については、宇佐宮領小野荘・岩崎荘を対象とした中山重記氏の研究、

図13 各地の脚付き土製煮炊具（上）と弥勒寺出土土器（下）

弥勒寺領八坂荘を対象とした河野泰彦氏の研究、弥勒寺喜多院領の都甲荘と香々地荘を対象とした飯沼賢司・桜井成昭両氏の研究が詳しいが、これらの荘園は十一世紀段階の弥勒寺における堂舎の建立と維持のために形成されていったものとはいえ、その実質的な支配は石清水八幡宮の善法寺家などにあつたとされており、その点でも両者の分布になんらかの関係のあつた可能性を傍証しうるものと考えられる。

加えて弥勒寺跡の発掘調査からもこの凸帯付きの土器碗および脚付き土製煮炊具が出土しているのである（図13³²）。遺物の出土したG2区は、弥勒寺の食堂または政所の推定地に近いとされている地区であるが、SK3は幅二・三mで長さ五m以上の溝状を呈し、その中・下層から炭化物に混じつて多量の遺物が出土している。出土した遺物の半数以上が完形品で、構成は土師器の坏・皿を中心に碗・鉢・鍋・鼎・黒色土器・土製賽子などにおよび、なんらかの祭祀に使用された土器類が終了後に一括廃棄されたものと推定されている。時期は十一世紀前半に比定されている。

またSK5は直径一・三mの円形で断面は浅い皿状を呈する土坑であり、遺物は南半部に集中して一括廃棄の状況を示している。時期は一〇世紀末に比定されている。共に一括廃棄の状況を示す遺構からの出土であることに注意したい。なお既に指摘しているように³³、脚付きの土製煮炊具は、十二世紀後半から十三世紀代を中心として西日本の瀬戸内海沿岸を中心とした地域に分布し、これについても儀器である可能性が非常に高い製品と考えられるのである（図13）。

さらにもうひとつ注意されるのが、この分布と経塚の分布の関係である（図10）。九州における経塚の分布の背景については、既に千々和実氏によって修験道との関わりが指摘されており、またそこで八幡信仰との関係も述べられてきている³⁴。先に英彦山の遺跡から出土した黒色土器の事例を紹介したが、これを前提とすることができれば、あわせて説

明できることにもなる。

以上、平安時代後期から鎌倉時代において西日本に流行する土器碗の中で、瓦質に焼成する碗が畿内と北部九州にのみ限られるその背景を、それが儀器である視点を前提として、石清水八幡宮と宇佐宮弥勒寺の関係と対比して考えてみた。それではこの仮説が中世都市京都の特質とどのように関わってくるのであろうか。次にはその問題について考えてみたい(図14)。

図14 石清水八幡宮の荘園・別宮分布図
町田和也作成(網野善彦、註43)

2 日吉山王社——土師器皿——

中世史を考古学の方法で考える最初の方法として遺物研究がおこなわれ、中でも土器の年代研究が大いに進んだ。それは土器が中世社会で通用にみられる日常容器であり、それゆえに、その変遷は中世社会全体の変化を説明する際にも有効であるといった見方を大きな前提としていた。こういった見方は、中世考古学研究の諸段階の中で必ず経なければならぬものであり、実際多くの成果がそこから生まれたことも事実である。しかし研究の深化により、普遍的だと思われていた土器碗が西日本にみられる現象にすぎないこと、さらにそれも中世全体を通じて存在していた訳でもないことが明らかになるにおよび、遺物のとくに土器を中心とした研究は、それが中世社会にとって通用にみられた日常容器であるといった前提を見直さなければならなくなってきたてきており、その結果それによって描き出されてきたような土器からみた様々な現象説明に対しても、それがけっして中世社会の全体を説明する手がかりにはなりえないことも認識しなければならぬ状況になってきている。土器研究は意味論への展開が今最も求められている。

さてそのような現状において、その最も端的な例のひとつが、いわゆる京都系のかわりけと呼ばれる土器の皿である。その問題提起は主に東日本の平泉や鎌倉で生まれ、藤原良章氏に代表される文献史研究からの指摘も受け、筆者はそれに対する京都における回答として、①京都型土師器皿の拡散の背景を中世の前期と後期で別に考えること(後期は式三献が大きな手がかりになる)、②これまで漠然と京文化としていた実態を再検討すること、それによって平泉と京都の関係を例えれば、京文化と平泉ではなく、平等院と平泉または鳥羽離宮と平泉といった関係に直すこと、③東日本で大量に一括廃棄されているものけっして通用ではなく、平泉や鎌倉・葦山などの一部の遺跡にすぎないこと、④東日本で

は京都系または京都型の在地系土師器皿以外に、(手捏ねではあっても京都の同時期の様式を意識しているとは考えにくいという意味での)京都型ではない在地系で特定の地域の型に分類される土師器皿のあり方も視野に入れて説明する必要があること、さらに⑤その流行が十二世紀後半を初現とするものではなく、むしろ一〇世紀後半以来の文化の流れの中で最後にやってきたものである可能性を指摘し、藤原良章氏がその意味としてあげたいいくつかのあり方の中で、長野県旧御射山遺跡での事例をもとに、特殊遺跡に限定されないこともある中世前期におけるその拡散の背景に、儀礼のなかでも、特定はできないが宗教的な側面がそこに強く介在していた可能性を述べた³⁶⁾。

なおこの点については、既に浅野晴樹氏や荒川正夫氏が、東日本における京都型土師器皿の分布と変遷を整理した中で、分布の特徴が、平泉は言うに及ばず宮城県では多賀城周辺、福島県では田村氏または新宮氏の勢力域、北関東では香取社との関係および日光男体山、武蔵では多摩

図15 東日本における手捏ね土師器皿の分布
(浅野晴樹、註37)

ニュータウン内の遺跡であるが、十二世紀以来寺院の形成や館の存在の指摘されている地域などで、従来の政治権力の場以外に有力な寺社勢力と関わっていた可能性を指摘しており(図15)、それに通じる見方ではないかと考える³⁷⁾。

しかし一方でこのような東日本における、かわらけと宗教性との関係の可能性に対して、宴会儀礼を意識した研究もすすめられ、飯村均氏は、生活史研究所による研究会において、その的確な整理をおこなっている³⁸⁾。氏は土師器皿を手捏ね成形と轆轤成形の両面から検討する中で、十一世紀の様相が不明であるものの、東日本における土器の一括廃棄の源流は、すでに一〇世紀に各地の支配拠点で成立した宴会型式の痕跡にあり、平泉や鎌倉でみられる手捏ね成形の「かわらけ」の一括廃棄は、その王朝国家期からの宴会形式に新たに付加された価値観であること、それゆえそれらは当初はまさに工人の移動をも思わせるほどの「京都型かわらけ」であったが、その後の型式変化や法量変化は、「京都系平泉型かわらけ」と呼ぶべき在地の独自性をもって展開していることを出土状況ともあわせて指摘し、結果的に東日本的な宴会儀礼の確立は、(それらが在地に定着した…筆者注)十三世紀中葉に迎えることになるとした。

吉岡康暢氏も指摘するように、平安時代以来の政治社会において、供宴はあらゆる属性をもった行為であり、研究会の趣旨により、かわらけ(土師器皿)のもつ意味の前提は宴会に限定されたが、東日本の一括廃棄が京都型または手捏ねかわらけと直接の因果関係に無いという事実と、それが大勢は一〇世紀を起源として十三世紀中葉またはおおむね十四世紀までの状況である点を確認した点で、大きな意義が認められる。

また吉岡康暢氏も東西日本の土製小型容器の出土状況の差異に注目し、藤原良章氏のかかわらけに対する説明が西日本の状況を説明しえていないことを指摘し、分析の条件として中世前期と後期を分けること、後期に

ついでには儀式の用具であり、前期については公家における儀式の後段で組まれる穩座での使用が土師器であることに着目して、それが一〇世紀後半にはじまることと一〇世紀後葉に変化をする京都の土師器皿とを関連づけ、土師器皿は、院政の饗宴空間がその使用を増幅させた「簡便化を志向する民需用食器の極限」であり、その拡散は「饗宴セット」として十二世紀中葉に列島規模で出現するが、西国は独自に食器圏の形成を終えていたために普及せず、逆に古代の土器生産体制がほぼ解体していた東国では、使い捨ての食器になじまない村落部と、洪下地塗りの粗製漆器がひろく使われていた東北を除き急速に普及した、と説明した³⁹。

かわらけのもつ意味を宴会儀礼に絞ったこれらの説明は、確かに多くの点で、考古学の研究成果と一致する状況をみせ、その点で説得力の高い仮説だと言うことはできよう。平泉以外の大量廃棄でない遺跡の場合でも、それぞれの遺跡に供宴をおこなわなければならないような性格を与えられなければならないが、各々その場所に応じた供宴がおこなわれていたのだとすれば、一応その説明はできることになる。

しかしそうであったとしても、それがなぜ東日本にのみ分布するのかについて、その理由は十分説明できたことにはなっていない。西日本の各地では古代にさかのぼって供宴に軸をおいた京都型の政治形態はとられなかったのだろうか。けっしてそんなことはないと思う。吉岡氏が説明するように、西日本では地域毎で独自の土器の生産体制が確立したため、京都型はいうにおよばず京都系のかわりもそこに入ることができなかつたとするならば、それではそのような強い地域性の枠を越えて、西日本の全域で流行した土器碗の存在はどのように説明されるのであるか。たとえば、古代以来の供宴の実態を跡づけた脇田晴子氏は、結論として天皇家と皇族が正式の「食器」とした文化の中に土器は見あたらず、問題は神社の神事や八幡宮放生会などにおける土器の使用ともしている⁴⁰。

したがって、むしろここでは「供宴」「公家政治」といった視点だけではなく、土師器皿による一般論としての「供宴」の習慣をもっていたのが東日本だけであり、それではその「供宴」の習慣とはいったいどのようなものだったのかと考えるべきなのではないだろうか。

本章は、この疑問を前提として、西日本にひろがる瓦器碗の分布と石清水八幡宮の動向を重ね合わせることができるかどうかの予測の中で、西日本の土器碗の中でそれを瓦質に焼成しているのが畿内と北部九州だけであることを手がかりに、宇佐宮寺である弥勒寺領の分布と北部九州の瓦器碗の分布との類似と、石清水八幡宮と宇佐弥勒寺の密接な関係に注目し、前項で述べてきたような仮説を組み立ててきた。

しかし、それでは石清水八幡宮が主導して瓦器碗を生産しており、瓦器碗の使用法が八幡宮の、例えば放生会などの儀式と直接結びつくものであったのか、といった問題については、寺院の構成員の中に非常に多くの種類の職人のいること、寺院がその存立基盤を職人や商人などの経済利益によっていたことなどが既に指摘されているため、石清水八幡宮がその一部で瓦器碗を生産し、その儀式の中でそれを用いても構わないとは考えるが、それぞれの検証には至っておらず、かつそれに関わる生産と流通と使用法とそれぞれが全く別の論理によって形成されていた可能性も指摘しながら、この問題は今後の課題としたい。

しかしここで重要なのは、西日本での土器碗の存在が、例えば瓦器碗について石清水八幡宮と宇佐弥勒寺の関係の中で説明することができるのであれば、東日本でみられる土師器皿（かわらけ）の分布の背景も、やはりそういった寺社勢力との関係で説明できるのではないか、という点なのである。

その点で話を先のかわりに戻せば、土器ではないが、同じ窯業生産の製品である陶器については、その生産主導者を白山社とむすびつけた吉岡康暢氏の著名な研究がある⁴¹。氏は、加賀最大の宗教的権門として、

地域の経済権益にも関与した比叡山末の白山宮の範囲が、十二世紀中葉には西は普正寺遺跡の所在する佐那武白山社から、東は越後南部の能生白山社に及んでいたことに着目し、法住寺白山社を核として展開した珠洲窯の製品が、白山宮神人の身分をおびる刀禰級在地領主支配下の廻船によって運ばれたことを予測し、また珠洲焼のもつ特殊性の中でも、その技術系譜が古代の須恵器工人を源流としている一方で、とくに特徴的な造形と加飾法においては、東西日本の焼き物文化を合成しつつ朝鮮半島や中国の情報もとりこんでいる背景に、修験者が介在した可能性も指摘したのである。⁽⁴²⁾

また同様な視点は伊勢神宮と常滑窯製品の関係についても指摘されている。⁽⁴³⁾しかしこれをそのまま土師器皿に置き換えても、それだけでは京都とそれぞれの地域とのつながりは説明できないのである。

ところがそれをつなぐ存在が、網野善彦氏によって指摘されていた。⁽⁴⁴⁾それが延暦寺山門と日吉社である。日吉大社は、古事記の大国主神の条にみえる大山咋神の鎮座する牛尾山の祭祀を起源とする東本宮と、天智天皇が六六七年に三輪明神を勧請したと伝える西宮を中心として比叡山東麓の坂本に所在している。この牛尾山は、比叡山の大比叡に対して小比叡と呼ばれ、山頂に巨大な磐を配する円錐形の整った神奈備山であるが、日吉神の起源は、本来この牛尾山を中心とした古代の神体山信仰にあるとも言われる。しかし西本宮が比叡山延暦寺の守護神となつて以降は、延暦寺の発展にしたがい、神仏習合のもと、中世の日吉社の中心的な役割を担っていく。なお天皇家との関係は、延久三年（一〇七一）の後三条天皇の行幸がその古い例として知られ、元徳二年（一一三〇）の後醍醐天皇まで数多くの参詣がおこなわれたとされている。⁽⁴⁵⁾

そんな中、網野善彦氏が述べているように、一〇世紀後葉までに山門が若狭に荘園を形成して以降、北陸道の諸国には多くの山門と日吉社領の荘園が設けられ、また加賀の白山社、越前の氣比社をその末社とし、

出羽以北についてもその末社や末寺が分布することからも、山門と日吉社は、北東日本海域に対して強い影響力を及ぼしていたと考えられている。そしてその実際の運営を担ったのが近江国愛知郡司も兼ねた中原成行などに代表される日吉神人であった。かれらは大津を中心に右方と左方に分かれて十二世紀前半から鎌倉期まで「北陸道神人」と呼ばれた巨大な組織を形成して北陸道諸国に分布し、出挙・借上の活動に従事して、ひろく日本海の廻船人として活躍し、あるいは日吉神人であると同時に氣比の神人でもあった中原政康のように、敦賀に居住して和布・丸匏・鮭などを貢納していたとされる。

したがって京都のかわらけも、日吉社または日吉神人を介することができれば、白山社と共に日本海ルートにのつて広く東日本にその分布を伸ばすことが可能となるのである。従来平泉・葦山・鎌倉に注目して考えられてきた東日本の京都型および京都系かわらけであるが、実はその分布が日本海側にもひろくみられることが、飯村均氏の整理によって示されており（図16⁽⁴⁶⁾）、今後それらの詳細な遺跡の分析は必要ではあるがこの見方を傍証するものともなっている。

そしてこのかわらけのもつ宗教性について、明確なその関係がやはり日本海側に位置する大楯遺跡で発見された。⁽⁴⁷⁾

大楯遺跡は山形県飽海郡遊佐町に所在する十三世紀代の集落遺跡であり、鳥海山を源流とする月光川と日向川で挟まれた自然堤防の微高地上に立地している。一九八六年以降の調査により、木柵で囲まれた地区とその中から礎石建物を中心とした規則的に設けられた井戸と建物群が発見された。このうち礎石建物のSB401は、三間四方で東に庇をもち、さらに東に一間の張り出し部をもつとされる（図17）。出土した遺物は、手捏ね成形と轆轤成形によるかわらけが八三・五％で、これに珠洲窯系陶器・越前窯陶器などの国産製品と、青磁・白磁などの中国製品も多数みられる。

図16 東日本における12・13世紀のかわらけの分布（飯村均、註38）

図17 山形県大楯遺跡のSB401と出土土器（註47）

さてこの遺跡の評価であるが、SB401に代表される建物は、栃木県の下古館遺跡でも注目された、一般の居住用建物とは異なった性格をもつものであり、木製の五輪塔形の碑伝が出土していることとあわせて、河野真知郎・飯村均・八重樫忠郎氏らによって、中世の神仏習合下における神社を中心とした遺跡であるとまとめられている⁴⁸⁾。

さらに八重樫忠郎氏によって平泉においても古代末期のかわらけの使用形態は宗教性をおびていたとの指摘もあり、また飯村均氏も先の宴会儀礼の整理の中で、宮城県山王遺跡の中で宗教儀式で使用された大量のかわらけの事例を紹介している。

現時点において、これまで述べてきたかわらけの意味論としての宗教性について、それはあくまでいくつかあるうちの選択肢であるかもしれない、その実態についても石清水と瓦器碗との関係と大きく異なるところはないかもしれない。しかしこれらの状況において、その可能性は決して少なくないものと考ええる。

ところで、その主役を任せた神人については、『小右記』の永祚元年（九八九）の条や『百鍊抄』にみる永延元年（九八七）の強訴で知られるように、記録には一〇世紀後葉にその姿を現し、十一世紀に入ると宇佐をはじめとした大寺社に属する神人や悪僧は、神の権威を背景にして強訴などにおよび、「王法」を越えんとするまでの政治的な問題にもなり、ついに王朝側では保元元年（一一五六）に新制を発し、寄人を制度化して、神人・悪僧等を統制しようとし、おおむね十三世紀前半までには彼らを国制の中の正式な身分として規定したと考えられている。

一方その実態については、これまで中世後期の新加の神人・供御人については商工業者であると理解されつつ、中世前期の存在形態については、農民的性格をもった名主層などであったと考えられていた。しかし、石清水八幡神人は、綱引神人であったものの、山崎神人は油売、淀神人は塩、大住神人は薪、和泉・摂津の春日神人は魚貝の売買をおこなって

いたとされる多様な職能民でもあり、立場としては実力をもった名主層で、しかも一般の人々とは区別される存在であったとも考えられている。しかるに鎌倉後期になると幕府は、寺社の造営・修理のための勧進を認める一方でとくにそれ以外の収益行為を禁圧しようとし、その結果それを活動の大きな一端としていた神人は力を失い、また山門に属して日吉神人もあった土蔵法師が俗体となって高利貸しを始めるなど、商工業者が社寺の保護を必要としなくなるほどに成長するにおよび、零落し、そこに南北朝の大きな動乱が影響を及ぼして、中世前期における神人・供御人制に崩壊が訪れるとされている⁴⁹⁾。

なお、中世の神人の活躍と併行して、やはり様々な職能民をその構成員としてもっていた供御人の代表である藏人所燈籠供御人の河内鑄物師についても、十四世紀前半で姿が見えにくくなってきている⁵⁰⁾。

一方これに対して瓦器碗と土師器皿の動向をマクロ的に見れば、その終焉は、東日本の京都型土師器皿がおよそ十三世紀にあり、西日本の瓦器碗や土器碗もやはり十三世紀代にその全盛期を終える。またその初現についても西日本の場合には内外面を黒色処理したいわゆる黒色土器B類の出現に対応して一〇世紀後半に遡る起源があり、東日本でも、先に紹介したようなかわらけの一括廃棄が一〇世紀代を源流とする飯村均氏の指摘があり、さらにそれは、先に述べたようにいわゆる口縁部を「て」の字に成形した土師器皿と疑似高台をもった土師器皿が列島の東西を越えて広く分布する時期にも対応している。

したがって東は土器の皿であり西は土器の碗といった異なる資料ではあるが、実はそれらを用いた行為は共に平安時代後半を起源とし、またその終焉についても南北朝期に一致すると見ることができるのである。これはその背景に共通する要素があったと考えられるものであり、その点でも、先に見てきた中世前期の神人の動向は、それに深く関係する可能性があると言えるのではないだろうか。

西日本の中世前期の土器を代表するといわれる碗がなぜ京都に入らないかということから、中世前期の土器のもつ意味と機能についてひとつの見通しを示し、またその裏返しに京都が果たしていた役割についても特質の一端を浮かび上がらせることができたかと考える。

②都市の風貌

1 七条町と八条院町——鑄造遺跡——

(1) 京都駅周辺地区の発掘調査

京都駅周辺では、一九八〇年代以降、現在の塩小路通りに面する地区で比較的広面積の発掘調査が進み、さらに一九九三年からは京都駅ビルの新築工事に伴う発掘調査がおこなわれ、平安時代～現代までの室町小路とその周辺地区の広範囲におよぶ遺構と遺物の状況が明らかにされてきている⁽⁵¹⁾。そんな中、野口実氏は考古学の調査成果と、すでに文献で著名な七条町と八条院町の研究成果を積極的に協業することにより、その史的性格について復原を試みた。そこで述べられた氏の結論的な問題提起は、この地区が網野善彦氏の言う「無縁の地」であるかどうかについてであったが、鎌倉をひとつのケーススタディとして、中世都市を中心と周縁といった面から考える視点が意識されてきている中、氏の問題提起は、中世の京都の構造を説明しうる一つの可能性を示したものであるとして大きな問題を投げかけた⁽⁵²⁾。そこで本章では、野口氏の研究に学びながら、その仮説が有効であるかどうか、図18と表1により主要な調査地点の成果を整理して、この地域の特質をふまえた京都の構造についてあらためて検討してみたいと考える(図19～21)。

なお平安京・中世京都の条坊制に従えば、室町小路は調査地312の東に、町尻小路は調査地202の東にあり、本来の塩小路は調査地460の南辺に、七

表1 京都周辺における調査成果の概要

条と八条の中間に位置する八条坊門小路は調査地45と43の間を東西にはしることになる。

さてこの地区で初めて現れる平安時代以降の生活の痕跡は、主に自然河川である。ただし調査地45からは奈良時代の井戸が検出され、やはり調査地45・289・44からは平安時代前期から中期と推定される井戸が、調査地41から池状遺構が検出され、遺物も土師器・須恵器・黒色土器以外に、緑釉陶器・灰釉陶器・銭貨が出土するなど、東市の設置と前代との関わりの中で、この地が平安京にとっての全くの縁辺であった訳ではないことを示している。しかしその他の調査地で検出されているのは全て河川であり、調査地461では室町小路の下層と左京八条三坊六町の中央部

図19 京都駅周辺の遺構と遺物(1)

からは、幅十八mの河川が検出され、これらの河川は十二世紀に埋められ、整地されている。また野口氏が指摘するように、東市の存在を背景とした土馬の出土が目立つのもこの時期の特徴である。

十一世紀代に入り、調査地の大半からは河川が消え、整地層の残存状況も良好になり、検出される遺構も増加する。そしてこの状況の延長上にあつて、この地区の特徴を示す铸造工人の最初の痕跡が、次の十二世紀代に現れる。調査地202のG二一P一は、深さ六〇cmで一辺が三m程の土坑であるが、十二世紀中頃から後半の土器および白磁碗と青白磁四耳壺と共に、刀装具鑄型・埴塙・鞆羽口が出土している。また調査地188からは青白磁の合子が五点、他に白磁碗・四耳壺が出土、調査地289の遺構数がピークになるなど七条大路・塩小路周辺で、一般の集落と明らかに異なる遺物の組成が出現する。

十三世紀前葉～中葉は基本的に前代の延長上にあり、さらにその特徴が拡大した状況を示している。調査地188では井戸数がピークを示し、調査地202ではとくにこの時期に井戸数とピット数が十一世紀代の四～九倍に増加し、一方で十三世紀後葉には再び急激に減少していることが明らかにされている。そしてこの状況をさらに多彩にしているのが、やはり前代同様の鑄造関連遺物と中国製陶磁器である。調査地289では土坑五五から大量の中国製陶磁器、土坑四四からは埋納銭が、調査地189の井戸二四からは兜金の鑄型、井戸九から中国製黄釉盤が出土、調査地202からは青磁水注、白磁壺または水注および陶器壺が出土し、同様な出土状況が調査地312のSD二四でもみられている。そして調査地202・312からは、刀装具鑄型と花瓶・燭台などの仏具鑄型および銭鑄型などが一〇〇点以上出土しているのである。

十三世紀中頃から後葉以降、この状況は大きく変化する。少なくとも調査地の188・289・460・189では遺構数が減少し、また墓と思われる遺構が目立ち始める。最も一般的な墓の形態は集石墓であり、主に礫を埋土し

て、さらにその上に黄褐色の泥砂土を盛り上げてマウンドにしたものもみられる。調査地289の土壙二七はその古い段階の遺構である。また調査地189からは常滑窯および東播磨系の埋甕が七基検出され、いずれも甕棺墓と考えられている。

さらにこれらの調査地から南西にあたる調査地455では、室町時代に入つて集石あるいは溝状で土師器皿と東播磨系控鉢を伴つたものが確認され、調査地421からはV期の木棺墓が検出されている。これらの墓は先に述べた一群とあわせて、これまで東本願寺周辺と認識されていた墓域がさらに西方へ広がる可能性を示している。またとくに調査地421の場合は、この時期において、通りを離れた奥に墓が築かれる可能性に対し、再考を求める指摘もなされている。

一方調査地312・291・461・285・424などの南東地区では、集落を構成する遺構が増え始める。このうちこの地区の特質を代表する調査地461では室町小路に面して建物が並び、その奥から倉・鑄造土坑・溶解炉基底部お

よび大量の鏡鑄型が検出されている。同様に調査地459では、十四世紀前半頃の遺構面から、八条坊門小路に面して炉が二カ所と洗い場と思われる溝状の土坑および礫敷遺構、そしてその奥から井戸が検出されている。井戸は小路の端から約十五mの位置にあり、建物を含めたその規模と配置は調査地461と類似している。なおこれらの遺構の内、井戸と溝状の土坑の構成は、製品にならなかつた銅を再利用するため「ゆりもの」作業のおこなわれた場所に推定されている。この調査区での鑄型は不明であるが、東に接する調査地421からは、鏡や仏具の鑄型が出土しており、やはり先に述べた調査地461に代表される状況と一致している。

また調査地43ではV期に錢鑄型と鏡・刀装具・仏像などの鑄型が出土、調査地423では鎌倉時代の鑄型として鏡と刀装具？が出土、室町時代の鑄型として鏡と鏡が出土している。

さらに調査地189からは東洞院大路に近い部分で、大量の箸と二〇〇点にのぼる漆器が、一部は整然と埋納された状態で出土している。中国製

図20 京都駅周辺の遺構と遺物(2)

陶磁器には特殊な製品はみられないが、このような漆器の出土状況は、一般の集落ではみられないものである。

なお調査地208からは、三万枚を越える銭が曲物に入れられた状態で出土しているが、その性格については、一般的な経済的な要因によるものか、あるいは呪術的な意味が付与されたものなのか、解釈が調査地点におよぼす影響が微妙であり、即断はできない。

なおこれら以外に特筆すべき遺構として、調査地461から礫敷の蔵基礎、調査地43から礫敷で周囲に幅1mの溝を巡らせたV・VI期の蔵基礎が検出されている。

この時期、この地区一帯は墓地と集落の二つの風貌をみせていたことになるだろう。

そして十五世紀中頃以降、この地区は再び違った様相をみせる。東本願寺前からひろがった墓地は、その後調査地461・424までおよぶことはなく、調査地188・289・460・189・202・208・312・291においてもこの時期以降は墓が築かれなくなっていく。そしてそれに代わって出現するのが濠である。調査地289の濠（溝状遺構一）は東西を軸として幅は3m以上、調査地208の濠（M二・六・七）は東西および南北につながり、幅は二・五～3mである。これらは「構」の一部であった可能性が指摘されているが、

図21 京都駅周辺の遺構と遺物(3) (網・山本) ※
※網伸一 1996「和鏡鑄型の復元的考察」
※山本雅和 1990「平安京左京八条三坊出土の銭鑄型」
共に京都市埋蔵文化財研究所 1996『研究紀要第3号』

戦国期に全国の諸地域で見られる館の区画溝にあてるとも可能と考える。

なお調査地45では室町時代後期（Ⅶ期？）に比定される面から、瓦質有孔磚を使った火床が検出され、金属加工との関係が考えられている。

（2）調査成果の検討

最初の問題は铸造遺構と遺物についてである。これまでみてきたように、現象的にはこの地区全体で金属加工に関わる遺構が検出されているが、実際には時期と調査地点で内容に異なることが指摘できる。

たとえば調査地189・202・312などで見られる鑄型は中心が刀装鑄型であり、時期はⅢ・Ⅳ期に比定される。一方調査地43・461・421などでみられる鑄型は中心が鏡であり、時期はⅤ・Ⅵ期に比定される。またこれらのふたつにわたった調査地群のちょうど中間に位置する調査地423では、Ⅲ・Ⅳ期とⅤ・Ⅵ期でそれぞれ前者が鏡と刀装具、後者が鏡と鑄型を出土している。ここでは時期を異にして両方の特徴を示している可能性がある。したがってこれらの状況を整理すれば、基本的に現在の塩小路通りより北にあたる本来の塩小路周辺では、Ⅲ・Ⅳ期以前において刀装鑄型と鑄型を用いた鑄造作業がおこなわれており、現在の塩小路通りより南にあたる八条坊門周辺ではⅤ・Ⅵ期において鏡鑄型と仏具鑄型を用いた鑄造作業がおこなわれていたのである。京都駅周辺で発見された鑄造関係資料は、実は地区と時期の二点で異なった内容をもっていたのである。

次に中国陶磁器についてみる。調査地188・189・202・289などの調査成果で示したように、この地区から出土した中国製品は、一般にみられる碗・皿類以外に、白磁または青磁の四耳壺・水注・合子および黄釉・褐釉などの陶器盤・壺を多くみることができる。調査地421からも青磁合子・香炉、白磁壺・合子、褐釉壺が出土し、調査地45からは褐釉壺が出土している。これらの製品はいずれも一般の集落では出土しない器種である

が、分布は調査地42を除きおおむね現在の塩小路通り以北と言え、しかも調査地289以外は室町小路周辺と言って良いものと考ええる。

なおこの地区で目立つ遺物として滑石製の石鍋を指摘できる可能性がある。その検討については次項でおこなってみたいが、おおむねⅣ期またはⅤ期の六条以南でこの資料の集中する傾向がみとれる。これらは中国陶磁器とあわせて、強い西方とのつながりを示唆する可能性がある。

最後に墓についての検討をおこないたい。京都の墓地については、現在山田邦和氏が最も体系的な整理をおこなっており、この地区については「七条町型」として都市の内部に取り込まれた墓として分類されている。また堀内明博氏もその著書の中で同様な景観を示している。確かにⅤ期における調査地202・208・312の状況は、山田氏の指摘するような墓地と都市の関係に置き換えることができる状況にある。しかし、網野善彦氏の視点による野口氏の指摘どおりに、埋納鏡の持つ経済的以外の要素をふまえてそれ以外の調査地点を総括的にみれば、先に述べたように、この地区に墓が広がるのは時期的にはⅤ・Ⅵ期であり、位置的には東本願寺周辺の調査地188・289から南西に位置する調査地421へかけての二帯であるため、一方で同じ時期にその南東に位置する調査地461周辺では鑄造工人をはじめとする集落が存在していたことをふまえれば、この時期における基本的な墓地と町との関係は共存より分離であり、八条院町に比定される調査地42を中心とした集落は、七条坊門小路あたりから南に広がる墓地群で一旦京都の中心とは隔絶された、京都の衛星村落的な景観を呈していた可能性も考えられるのである。

以上よりこの地区の調査成果をまとめてみる。最も大きな問題は、考古資料の内容がおおむね現在の塩小路通り（おそらく実際は調査地45と43の間に位置する八条坊門小路）を境界に、時期的にも質的にも北側地区と南側地区の二つに分かれる点である。その内容を繰り返せば、北側地区は一部でⅡ期に遡る時期から集落（町）が形成され、Ⅲ・Ⅳ期を集

落のピークとして、一般の集落ではみられない種類の中国陶磁器をもち、刀装鑄型を中心とする鑄造作業をおこなう工人も存在していた。しかし先に見てきたように、ほぼ同じ地区のV・VI期は一面が墓となり、またVII期以降には町または館の周囲をめぐると思われる濠が築かれることになる。一方南側地区は、北側地区の集落(町)が終焉をむかえた後のV・VI期を中心として、主に鏡と仏具を鑄造した工房と漆器を大量に保有していた家、そして蔵などの建ち並ぶ集落(町)が営まれ、VII期以降は耕作地となる。京都駅周辺地域の中世的景観は、このように全く異なった様相を示す二つの地区が中世の前期から後期にかけてひろがっていたことになるのである。それではこれは何を意味するのであろうか。

ところで文献史研究の成果で知られているように、この地区は平安時代後期に東市の東に発展した市町と、それに続く七条町およびその後の八条院町にあたっている。このうち七条の市と町についてみれば、七条仏所の存在と併せてこの地に商人と職人が集住していたことは、『宇津保物語』『新猿楽記』『堤中納言物語』『今昔物語』などから知られており、とくに土倉などの金融業者を例にしたその繁栄ぶりは、『病草紙』や文暦元年(一二三四)の『明月記』の記事でも有名である⁵³⁾。

一方八条院町は鳥羽天皇と美福門院の間に産まれた八条院暲子が、その父母より伝領した二三〇カ所にのぼる所領のうち、京都に所在する一部であり、女院の死後、「八条院町十三カ所」として、後宇多天皇により、正和二年(一一三三)東寺に寄進されている。さらに仲村研氏と川嶋将生氏により、「八条院町所在注文」(一一三三)と元応元年(一一三三)の「八条院町年貢帳」、「八条院町地子並荒不作注進状」(一一三六二)から町の分布図が作成され、東寺領として、番匠・箔屋・椀屋・塗師・金屋などが、恒常的な年貢地子と段銭などの臨時税を納め、町人として居住し、また調査地424の北端は、元応元年の年貢帳にみる左京八条三坊十四町の北面で「散所物共也」とされ、そこがかつて八条女院御

倉敷の北辺にあたっていたため、御倉の管理と運搬に従事した人々も住んでいた可能性が指摘されている。また元応元年(一一三三)の八条院地子帳によれば、調査地424に關係する八条坊門と梅小路の間の室町小路東側には、番匠・丹屋・箔屋のあったことが知られ、鑄造工人以外の様々な職種の人々も住んでいたことが知られている。

したがって前項で見てきたような、考古資料からこの地区を特徴付ける鑄造関連の遺構と遺物は、おそらくこのような文献史研究で示されている中の一部であったと考えられることになる。換言すれば、北側地区の状況は七条町に、南側地区の状況は八条院町およびその周辺地区に対応し、それは北側地区の中心時期がIII・IV期であり、南側地区の中心時期がV・VI期になってくることも矛盾しない。それ故北側地区の主要な鑄型が刀装具であり、南側地区の主要な鑄型が鏡であるのも、それを前提として考える必要がある。七条町繁栄の最大の要因が、野口氏の指摘する様にその東にあった八条院御所と、西に位置した西八条第にあつて、刀装具鑄型の存在がそれと深い關係にあるのであれば、南側地区で出土した鑄型のほとんどが鏡であることは当然東寺との關係の中で見ていかなければいけないことになり、その結果両者は同じ鑄造関連の遺跡であったとしても、それぞれの工人の社会的存在形態は全く異なっていた可能性が生じ、それぞれの町の都市・京都に対しての役割や性格についても、あるいは異なった構造をもっていたことが検討すべき点として浮かび上がってくるのである。

そして七条町と八条院町を見た場合、それらに対する野口氏の結論的な問題提起は、網野氏の言う「無縁の地」であるかどうかについてであった。ところが、七条町の場合は、同時期に存在した八条院殿と西八条第の存在において、その環境は少なくとも直接鎌倉の前浜地区とはつながりにくく、八条院町においても、現状ではあくまで東寺との關係で位置付けられるために、やはり鎌倉の前浜地区とは性格の異なる可能性が

図22 八条院と西八条第 (『京都の歴史』第2巻 別添地図参照)
(C) ZENRIN CO., LTD. 1998

あると言わざるをえない(図22)。

平安時代後期以降の六条以南は、院政を支えた受領などの中小貴族の屋敷がならび、さらにそれに加えて、平氏の西八条第や源為義の六条堀川館などに代表されるような、平氏政権を核とした武家による新しい都市の中心とも言える状態であったとも言われている⁽⁵⁶⁾。先に七条町周辺の調査結果で中国製の陶磁器が大量に出土することもこの地域の特徴であり、なかでも壺類の目立つ点を述べたが、先のような六条以南の住民構成を勘案すれば、その出土も単に商業ゾーンだからといった以上に、東国の武士との関係で説明できる可能性がでてくる。

その点で鎌倉の化粧坂など同様に、中世都市・京都の周縁部に当然形成されたであろう、いくつかあったいわゆる「無縁の地」の諸条件から、墓・職人によってその対比を可能とするのは、むしろ八条院町周辺であると言えるかもしれない。しかしその景観は、やはり脇田晴子氏の描くような、都市の中心とは一旦切り放された「同業村落的手工業者集団」の地区として整理されるべきものであり、それ以外の形で都市における構造の一端を説明するための言葉を見いだし得ることはできない。しかるにこのような商工業で特徴づけられる三条または四条以南の地域は、いわゆる公家文化で代表されてきた京都のイメージと異なりながら、実質的には中世後期の祇園祭りや町衆といった様々な面で「京文化」を代表するひとつの貌であったこともまた事実である。したがって中世都市京都の特質は、ある意味でこの下京によって説明できる可能性があるかもしれない。そこで次項では七条町・八条院町から地域を拡大して、およそ四条以南にあたる中世の下京を対象に、その検討をおこなってみたいと思う。

2 下京——石鍋——

京都が平安京の条坊空間から左京を中心とした都市へ変貌していったことは、慶滋保胤が著した『池亭記』によってよく知られているが、その後建治元年（一二七五）には、『思円上人一期形象記』で「上下町中」として記されたような、二条以北の「上の町」と、四条から六条を中心とした「下の町」の、二つの大きな集落から構成される景観を呈するようになったと言われている。⁵⁸一般に下京は室町時代以降の四条大路以南にひろがった商工業の街を指すが、その前身はすでに鎌倉時代後半にみられた可能性がある。そしてその中世前期における「下の町」あるいは下京を考える際に無視できないのが、祇園社および法華宗との関係である。

このうち伊藤正敏氏は前者に注目して、鴨東は日吉社の末社である祇園社感神院にとってその境内地であり、さらに京中はその延長としての旅所が検非違使の検断を排除して散在し、また十四世紀初めの頃の京中土倉約三〇〇軒のうち二四〇軒ほどが山門の支配下にあった点および、京を代表する商工業の座が祇園会のおこなわれる範囲におかれ、さらに五味文彦氏の指摘した『一遍聖絵』の説明などにより、京都が比叡山の門前都市であり、とくに一遍の活動した鴨東から下京の地域が、その中核的空間であったとした。第①章で京都型および京都系のかわけが日本海ルートから東日本へ展開する背景として日吉神人の役割を推定したが、氏の指摘はそれを洛中へ関連づけるものとして、少なくとも中世前期においては協調できるものがある。⁶⁰

しかし周知のように、洛中における宗教勢力の存在はそれだけではなく、詳細にみれば、八条坊門猪熊と七条油小路に御旅所をもっていた稲荷社は五条以南を氏子地域としていたとされ、七条辺りで生まれたものは稲荷を産神とした例を『今昔物語』にみることができる。前節で京都

図23 京都市内の寺社勢力（京都市 1971『京都の歴史』2）

駅周辺地域の鑄造関連遺跡に注目したが、深草は土器作りの伝承をもつ地域であり、そこに狭山と丹南の鑄物師に対比されるような、あるいは鑄物製作に重要な鑄型土との関連を考えることができるのであろうか。なお祇園社の氏子区域は、京中で最も富裕層の集まっている五条から三条の間とされ、さらにその北には上下の御霊社・今宮社・北野社といった神社と氏子の区域があったと考えられている(図23⁶¹)。

さらに寺院についてみれば、鎌倉新仏教を代表する時宗は、一遍が文永十一年(一二七四)・弘安二年(一二七九)・弘安七年に京都へ入り、烏丸五条・四条京極・市屋道場などに滞在して布教活動をおこない、その跡を継いだ他阿真教は正安三年(一三〇一)に藤沢四郎太郎の援助により七条道場金光寺を開き、さらに一遍の甥の弥阿弥陀仏聖戒も六条河原近くに歓喜光寺(一二九九)を開いたとされている。いずれも下京の範囲である⁶²。

一方法華宗の活動は、永仁二年(一二九四)に日像が入京したことに

図24 京都市内調査地点位置図
(C) ZENRIN CO., LTD. 1998

よりはじまり、「現世利益」の思想が商工業者に受け入れられる中、南北朝末期には妙頭寺が四条櫛笥(一三二一頃)に、本門寺が二条西洞院に、上行寺が六角油小路に、本国寺が六条堀川(一三四五)、妙満寺が六条坊門室町(一三八三)、本能寺が六角大宮(一四三三)に開かれ、幕府との対立もあったが、洛中の豪商や、妙頭寺は足利義満の支援も受けて発展を続け、寛正六年(一四六五)の山門からの攻撃の危機に際しては、「京都の半分は法華宗たる」として迎え討つほどの勢力をもち、応仁・文明の乱後には、京都の主人公となっていた土倉・酒屋・富裕商人などの町衆を中心的な信徒としてもつまでになる。

そのなか、最も注目されるのが日隆の動向である。彼は永享元年(一四二九)に六角室町の豪商小袖屋宗句の支援を得て本応寺(後の本能寺)を開くが、その以前に摂津・河内を巡り、尼崎に富商の援助で本興寺を建て、さらに郷里の北陸および瀬戸内一帯で伝道をおこない、堺・備前・讃岐・備中・備後にそれぞれ富商・土豪の援助で寺を開き、さらにはその弟子の日典・日良は海外交易の中継地である種子島から屋久島までをその影響下においたとされるのである。法華宗の活動は、宗教だけではなく、有力な洛中と堺の商人を軸として、尼崎から瀬戸内海を経由して遠く海外までのびる経済ルートもおさえていたのであった⁶³。

なおこれ以外に、一般庶民とは懸隔のある存在の臨濟宗諸寺が一条以北と洛外にあって、これまで述べてきた諸社寺と対照的な位置関係にあったことも周知の事実である。しかし海外との交易については、東福寺が十四世紀前半に新安沖の沈船を派遣したと推定されており、洛中へ持ち込まれた物資の供給源として、同船から発見された二八トンにのぼる銭の意味もあわせて、それらの存在も軽視するわけにはいかないだろう⁶⁴。

それでは考古資料は、このような文献史研究の評価にどのように対峙しうるのだろうか。調査地点毎にその成果をまとめたデータの整理か

らすすめていききたい(図24・25)。
平安時代は九世紀、一〇・十一世紀、十二世紀の三時期に区分した。九世紀のドットは平安京の全域におよび、それぞれの調査地点から当該期の遺物または遺構が検出されている。また右京の七カ所で流路が確認されており、それらはわずかに北北東から南南西へ向いた軸によって一連のものである可能性が指摘できる。一〇・十一世紀は、右京でも調査

図25 京都市内中心部の調査地点位置
(C) ZENRIN CO., LTD. 1998

地点データの分布を残してはいるが、九世紀と異なり、調査地32で墓が、四カ所で耕作地が確認されている。明らかに右京から調査地点データが撤退するのは十二世紀代である。ドットの一部は嵯峨野へ続く右京の北西部に残るものの、それ以外の右京の地域には耕作地がひろがり、一方で左京を東へ越えた地域にもドットのまとまりが認められる。なお左京内でのデータの分布に偏りは少ないと思われる(図26)。

十三世紀はその前半と後半で二時期に分けた。十三世紀以降、右京からのドットの撤退は決定的で、逆に分布は鴨東へも広がる。また左京内の分布は南部への偏りがわずかにみえる。十三世紀後半の分布は基本的に前代と同様であるが、遺構の性格を分ければ、三条以南の分布に墓が散在し、それはまた鴨東地区でも認められる。また一条以北のドットが前代より増加している点もこの時期の特徴である。

十四世紀は分布がいくつかのまとまりに分かれる。一条以北はドットの集中が明瞭に認められる。一条～三条ではドットが減少し、その中に墓がみられる。三条以南ではおおむね六条までのまとまりと八条周辺のまとまりに分けられ、墓は七条および四条でもみられる(図27)。

十五世紀は分布の南限が六条にあり、一方三条から四条と一条周辺にドットの集中をみることができ。十六世紀は七条から一条以北までドットの分布がつながり、特殊な遺構としては、三条を中心とした地区で堀が多くみられるが、その詳細についてはすでに山本雅和氏が整理している(図28⁶⁵・29)。

以上、京都市内の調査地点データを基に、その分布の大略の変遷をみてきた。周知のように遺跡を構成する要素は遺構・遺物およびその出土状況であるため、調査地点の本来的な評価は、遺物の出土状況を考慮した上での遺構の説明によっておこなわなければならない。そのため、現在デジタルマップ上に調査地点をおとし、将来それらを多変量解析的に分析すべく、検討が可能と思われる情報について、HTMLでそれぞれ

図26 調査地点分布の変遷(1) (C) ZENRIN CO., LTD. 1998

▲…耕作地

○…流路

図27 調査地点分布の変遷(2) (C) ZENRIN CO., LTD. 1998
▲…墓
○…耕作地
□…掘

図29 下京中心部の調査地点
(C) ZENRIN CO., LTD. 1998

図28 下京中心部と堀の分布 (山本、註65)

のデータを関連付け、蓄積をすすめている。

都市遺跡としての京都の、とくに遺構に注目した定量分析は、山田邦和氏による精緻な研究を代表とするが、この方法は、座標レベルでの調査地点情報に各々の遺構と遺物の情報を統合できるものであり、文献研究の描いてきた中世京都と自由なスケールで比較検討できる点で、従来よりその実態を意識した議論がすすめられるのではないかと考えている。今回の成果はその作業過程の一部であり、今後さらにデータの精度を増していきたい。

さてそのなかで問題は考古学からみた下京の特質であるが、ここでは一般に石鍋と呼ばれている滑石製の煮炊具に注目してみたい。

石鍋は長崎県の西彼杵郡をその主要な産地として鎌倉時代を中心に流通した煮炊具である。⁽⁶⁷⁾大瀬戸町の調査によれば、町内には11の製作跡が存在し、発掘調査で検出された焼き火跡のC14年代は十一世紀前後の数値を示し、記録では弘長元年・天承元年・久安二年の文書に見えるなど、その登場は遅くとも十二世紀にさかのぼるものと考えられている。⁽⁶⁸⁾しかし消費地の発掘調査によって得られるデータを見ると、北部九州では十一世紀に遡る事例も紹介されているが、⁽⁶⁹⁾京都市内で十二世紀から十三世紀前半にみられることは少なく、主体は十三世紀後葉から十四世紀代と理解される(図30)。

以下出土分布をみていく(図31)。先に述べたように、時期的には十三世紀後半から十四世紀代に集中し、洛中の南部に比較的多く分布する状況がみてとれる。しかし調査地点全体の分布をみると、とくに十四世紀代は三条以北のデータが散漫であり、一方で一条以北と鴨東地区は、調査地点数がそれほど多くないにもかかわらず石鍋が出土しているため、結果として必ずしも分布が三条以南に集中する訳ではない可能性も指摘できることになる。

しかしその一方で、六条以南の分布の集中に注目すれば、それらの多

くは墓からの出土であることが指摘できる。ただし墓と思われる遺構に土釜が伴う例もあり、また東日本で墓に土鍋や鉄鍋を埋める事例も知られていることから⁽⁷⁰⁾、これは石鍋というよりも、鍋・釜あるいは鉢一般のもっていた呪術性に関わる問題が大きい可能性もある⁽⁷¹⁾。しかしそうであったとしても、土釜も土鍋も普及している洛中において、とくにここでは石鍋が目立つとも言え、その点においてやはり洛中南部地域の人々は、北部地域より石鍋を用いる機会が多かったと言えるかもしれない。

ところで石鍋は、外面に煤が付着していることから火にかけて使用されたことは明らかであるが、これまで実際にそれで何をおこなっていた

図30 時期別にみた石鍋の出土地点

のかは明らかにされてきていない。分布は西日本を中心として一部は鎌倉と十三湊などの日本海側でも知られているが、埼玉県の川越城跡、阿保遺跡・行司免遺跡などの内陸部でも出土しており⁽⁷²⁾、単に西日本だけにとどまらない可能性も考慮される。

一方煮炊具として最も有用な鉄製品に対して、中世前期の東日本では土製の煮炊具がみられず、西日本ではひろく土製の煮炊具が普及していた。これまでその理由として、東日本は鉄製品が普及していたために土製品が必要とされなかった可能性、あるいは調理法として土製煮炊具は湯沸かし具であり、そのような使い方を中世の東日本では多用しなかった可能性などが述べられているが⁽⁷³⁾、そうであるならば、この資料もま

図31 石鍋の分布
(C) ZENRIN CO., LTD. 1998

た、鉄鍋の補完といった消極的な意味以外に、その形と関わる特殊な用途に用いられた可能性も考えるべきではないだろうか。

石鍋の出土についてももうひとつ興味深いのは、京都以上に鎌倉での出土が多いことである。光明寺裏遺跡で約八〇点⁽⁷⁴⁾、今小路西遺跡で四五点以上⁽⁷⁵⁾、千葉地遺跡では約二八個体に滑石製スタンプおよびその未製品が加わる⁽⁷⁶⁾。諏訪東遺跡では十四個体の石鍋に滑石製のスタンプが十三点と温石十一点が加わる⁽⁷⁷⁾。調査面積との関係では、石鍋を大量に出土していることで知られている草戸千軒町遺跡が六六〇〇〇m²の調査面積に対して約二〇〇〇点の出土であるため、一mあたりの出土率は〇・〇三であるが、いずれも概数ではあるものの、光明寺裏遺跡が〇・一六、今小路西遺跡で〇・〇三、千葉地遺跡・諏訪東遺跡で〇・〇五と高い数値を示している。

このうち今小路西遺跡・千葉地遺跡・蔵屋敷遺跡⁽⁷⁹⁾・諏訪東遺跡は、いずれも鎌倉駅に近い山手に立地するが、一方で前浜の由比ヶ浜4-6-9地点では⁽⁸⁰⁾、方形竪穴の遺構1A、遺構190、遺構178・179、遺構372、遺構331などから石鍋が出土しており、なかでも遺構178・179からは鍋弦が出土し、遺構331出土の石鍋には口縁部に穿孔があるため、そこに弦をかけ、鍋と同様に使用していた可能性もかがわせる。方形竪穴の性格は未だ確定してはいないが、これらの状況から、あるいは石鍋は各々に伴う生活財だった状況も推定できることにはなる。

しかし佐助ヶ谷遺跡の建物15にみられるように⁽⁸¹⁾、九室ももっていたと思われる建物において石鍋は口径二〇cmほどの製品が一点、三室から構成される建物17でも同様な石鍋が一点の出土であり、鉄鍋と比べて極端に少ない容量とあわせて、一般的な日常品とするには、ほかの多彩な遺物の量に対してその懸隔はあまりに大きなものであると言わざるをえない。前浜地区の場合は、それを用いていた住民たちが、都市の周縁において極楽寺の強い影響下にあったという馬淵和雄氏の指摘を考慮する

必要があるのかもしれない⁽⁸²⁾。

中世前期の東日本で土製煮炊具のみられない理由のひとつが、鉄鍋の普及によるものであるならば、重量があつてしかし容量の少ない石鍋をわざわざ日常品として取り寄せる必要はあつたのだろうか。むしろ鉄鍋では果たせない役割が石鍋にあつたと考えた方が妥当ではないだろうか。それはなにか。その手がかりを得るために、石鍋の産地を代表する長崎県西彼杵郡大瀬戸町の中世について通観してみたい⁽⁸³⁾。

肥前国の守護は、武蔵国を本貫地とする武藤資頼が嘉祿三年(一二二七)以前に補任されるが、モンゴル来襲後の弘安四年(一二八一)までには、その職が執権であつた北条時頼の弟の時定に移り、さらにその後、金沢氏・北条氏を経て鎮西探題の滅亡する元弘三年(一二三三)には北条久時の子である赤橋英時が勤めている。このうち彼杵荘については、氏名・出自ともに不明であるが、鎌倉時代初期に東国御家人が惣地頭職として補任され、鎌倉時代中期になると、その下の小地頭職にも東国御家人が補任されるようになる。彼杵荘では武藤氏の系譜にのる少弐貞経が対馬国とあわせて小地頭を給付されており、建武三年(一二三六)の後醍醐天皇の綸旨案には、九条道教に給付された彼杵本荘地頭職が、以前は少弐貞経(妙恵)のものであつたとする記載がある。

なお少弐氏は武藤資頼が大宰少弐を勤めたことにより称された一族で、モンゴル来襲までは鎮西における中核にあつたがその後衰退し、貞経は新編成となつた得宗による鎮西探題の下で二番引付頭人になり、その不満が大友氏・島津氏と共にあつた元弘三年の鎮西探題攻撃の原動力になつたともいわれている。なお貞経の子の頼尚は北朝方につき筑前・豊前・肥後・対馬の守護となるが、博多の九州探題と競合する中で天授元年(一二三五)に今川了俊に殺されて勢力を失つていった。

南北朝期に入ると、彼杵では、鎮西探題の滅亡する正慶二年(一二三三)に、彼杵荘江申浦を本拠とする江申三郎が、後醍醐天皇の一宮尊良

親王をたてて謀叛をおこし、鎮西探題が討手をさしむけるなどの緊張状態が発生し、その後も足利尊氏と後醍醐天皇のそれぞれの側にたち、抗争が続く。その中、博多を拠点とする足利方の九州管領一色道猷は、彼杵郡から兵糧米を調達すべく計画をたて、後醍醐天皇皇子の懐良親王をたてた菊池氏との間で合戦をおこない、さらに正平四年（一三四九）には足利直冬が肥後へやってくることにより、尊氏側の一色道猷と菊池氏と、少弐頼尚と阿蘇大官司を味方に引き入れた直冬の三者鼎立の状態になり、彼杵荘もその中で翻弄されることになる。

このような鎌倉時代から南北朝期にかけての彼杵郡をめぐる錯綜した政治的環境の中で、しかしあれほどまでに大規模に石鍋を製作し、大量に瀬戸内を通過して、連続して鎌倉へ搬入することのできた、一貫した権利関係をこの中にみいだしうることができるのであろうか。

その点で注目されるのが東福寺と彼杵荘との関係である。彼杵荘は、鎌倉時代のおわりに東福寺領であったことが知られており、「東福寺文書」の「肥前国彼杵庄文書目録案」や東福寺の良覚が正慶二年（一三三三）の千早城攻撃などの見聞を記した「正慶乱離志」の裏面に書かれた嘉暦四年（一三三九）銘の「肥前国彼杵庄文書目録」などに、その多くの在地武士の名前が記されている。その中に石鍋を産した大瀬戸町に關係する地名も含まれており、元応二年（一三三〇）の肥前国彼杵庄雜掌所給鎮西御下知事の中で雪浦□□三嶋一方領主として田河彦太郎という人物が見え、また東福寺領肥前国彼杵庄御下知御教書訴陳以下目録の中の遠州（肥前国守護北条随時）御下知分に雪浦并馬手嶋領主として田河彦太郎宛の奉書が二通（正中二年（一三三五）四月二二日と五月十九日）みえる。雪浦は現在の大瀬戸町南部にあって、万助山・飯盛山・駄馬・目一ツボ第一・目一ツボ第二などの石鍋製作所跡が発見されている⁽⁸⁴⁾。したがってこのことをそのまま整理すれば、十四世紀前半に石鍋が製作されていたとき、おそらく下司としてそれに直接関わっていた在

地領主の一人は田河氏であり、東福寺はその本家として存在していたことになるのである。

一方東福寺は、九条兼実の孫で源頼朝の姪を母とする九条道家を根本壇越として、東大寺で受戒し、宋で学んだ臨濟僧の円爾并円を開基として建長七年に開堂した寺である。九条道家は、氏の長者として公家政治を代表すると共に、摂家将軍である四男の頼経を通じて幕府との密接な関係をもった人物であり、また円爾は、仁治二年（一二四一）に帰国し、北部九州を拠点として大宰府の崇福寺や博多の承天寺などを開いた人物である。いずれも北部九州と京都と鎌倉をつなぐ要素とみてよいだろう。加えて、承天寺建立に際しては、大宰小式藤原資頼が大檀那となっており、少弐と彼杵荘の関係も、この中に含まれる可能性がある。なお建武三年（一三三六）、少弐貞経の後に彼杵荘の小地頭を給付された九条道家が九条家につながる人物であるとするならば、それも彼杵と東福寺の関係を示すことになる。

西彼杵郡の石鍋の流通は、このような東福寺または鎌倉との関係において、鎌倉のバックアップの下で東福寺が主体となって成立したと考えられるのではないだろうか。

さらに中世の石工人については、彼らが寺院と密接なつながりをもっていたことはその製品からも推測できるが、大和を中心に東大寺法華堂石燈籠などをつくって活躍していた伊行末に代表される伊派の一流が、「大蔵派」として極楽寺の忍性に率いられ、元箱根の石仏群製作にあつたことが村野浩氏によって指摘されており、またその移動についても、弘安六年に（一二八三）長野県飯田市の文永寺石室内五輪塔をつくった菅原行長が南都石工と記していることから知られている⁽⁸⁵⁾。

その点で寺院は実際に工人を支配したかどうかはともかく、供給することは可能な立場にあったわけである。ちなみに東福寺には、円爾が宋から持ち帰った「大宋諸山図」があり、その中に水力による碾磑を用い

た麵と茶の製造工場の図がある⁽⁸⁷⁾。

なお千々和実氏は荒川流域の板碑の祖型を導入し、その製作に関わったのが、荒川上中流域の土豪であった丹治氏であった可能性を述べている⁽⁸⁸⁾。周知のように、丹治姓の工人は現在の大阪府南河内郡を中心にして古代より活躍していた河内鑄物師が有名である。鑄造遺跡でもある真福寺遺跡と河内の律宗寺院であった真福寺は別なため、河内鑄物師が西大寺流律宗に帰依していたかどうかは疑問であるが、鑄造製品の最も大きな注文主として寺院と関わっていた可能性は否定できない。

以上、下京における中世の特質を考古学から考える手がかりとして、石鍋の分布の背景をみてきた。京都市内における出土分布が南に多いこと、京都以上に鎌倉でみられること、石鍋に関わる記録と製作地遺跡での自然科学的な年代調査に対して、京都や鎌倉での出土が十三世紀後半から十四世紀に偏ること、などの考古学的な状況に対して、その最も大きな製作地であった西彼杵郡大瀬戸町の中世が、鎌倉ととくに東福寺に深く関わっていたことを確認できたと考える。しかしそれでは東福寺がどのようにこの石鍋を扱っていたのかというと、その点についての議論をすすめる準備を今はまだ持ち得ない。ただ、破損しにくいという点を除き、ほかの煮炊具に比べて有利な点が多くなかったとおもわれる石鍋を、単に荘園からあがる一般的な商品であったとすることで十分な説明にはならず、やはり東福寺が関わっていたという点で、そこになんらかの宗教的な付加価値のあった可能性を指摘しておきたい。

その点であらためて京都と鎌倉でどの程度石鍋の使用量に差があったのか調べなければならぬが、たとえば鎌倉の石鍋は東福寺が介在するものの、京都を超えて瀬戸内から西日本の状況と共通する状況もみせており、そのため文化としての京都の石鍋は、あるいは鎌倉から移入された可能性がないだろうかといった視点でも、検討する余地があるようにも考える。期をあらためて考えてみたい。

下京の中世は、それをあえて編年的にみるならば、平安時代末期から鎌倉時代は主に祇園社が、鎌倉時代後期には時宗が、南北朝以降は法華宗が、そして天文二年（一五三三）には、祇園会の執行に際して幕府と駆け引きをおこなない⁽⁹⁰⁾、また山門より独立した存在としての町衆がそれぞれ中心的な役割をもつて関わっていた。その中で南北朝期の下京を中心とする石鍋は、この時期に臨済宗も含めた様々な宗教勢力がとくに集中して錯綜し、結果的に日本列島全体に大きな影響を及ぼした盛んな経済活動を生み出していった、その実態を示す重要な手がかりであると考えられる。

おわりに

一九九九年十二月十一日に、小論に関わるもうひとつの重要な遺跡の現地説明会が、滋賀県大上郡多賀町の敏満寺遺跡でおこなわれた⁽⁹¹⁾。遺跡名にある敏満寺は、青竜山の西麓に位置する現在の胡宮神社を中心としていたと推定され、聖徳太子・慈証上人・敏達天皇・伊吹山三修上人のひとりである敏満童子などを開基として、記録によれば、天治二年（一一二五）に平等院を介して園城寺の支配下に入り、建久九年（一一九八）には重源が仏舍利を入れた銅製の三角五輪塔を当寺へ寄進したことで知られている。敏満寺遺跡の周辺は、天平勝宝三年（七五二）の「近江国水沼村墾田地図」（東大寺文書）にみえる水沼荘に比定されるなど古代から開発の進んだ地域であったが、中世においても、湖東の交通の要衝として、重源の諸国勧進の中でとくに北陸方面へ対する拠点であった可能性が指摘されている。

その後延慶二年（一一三〇）の太政官牒によれば、同寺は堂舎四〇・宝塔数カ所を有するとされ、元徳二年（一一三三）の記録には新熊野十二所と並び白山権現天満天神などの社名も並ぶ。室町時代以降は幕府と

のつながりが強くなり、尊氏・直義・義持・管領などの書状をもち、文和二年（一三五三）には後光厳天皇の宿所にもされている。しかし永祿三年（一五六〇）に浅井長政に攻められ学頭以下八〇〇人が戦死、また織田信長とも戦い、元龜三年（一五七二）には廢寺となり、現在にいたっている。

敏満寺遺跡は、このような歴史的環境を前提として、胡宮神社の背後にたつ青竜山から北へのびる丘陵上に立地し、一九八六年からおこなわれた発掘調査によって、火を受けた痕跡のある礎石や土塁と中世の土器・陶磁器類が発見されるなど、宗教施設だけにとどまらず、城塞的な機能ももっていたことが指摘されていた（図32）。今回の調査は、この丘陵の東側部分を中心としたものであったが、連続する埋甕土坑や溝で区画された建物群などが検出され、これまでの城塞的な性格に加えて、生産の要素と方格の町割りも推定されるなど、この丘陵全体が都市的な風貌をもっていたことが明らかとなった。

図32 敏満寺字図 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1988『敏満寺遺跡発掘調査報告書』

マクロ的にみれば、犬上川を水源とする大門池の灌漑システムから、この地域の農耕的な再生産原理の中心が琵琶湖に面した一帯であったことは否定できない。しかし一方で丘陵の稜線を北へ下った先は多賀大社の門前へつながる多賀道と交差しており、その点で重源が「結縁浅からぬ所」と呼び、また室町幕府とのつながりを持ったこの寺の重要性に注目すれば、おそらく中世のこの遺跡の正面はこの丘陵の北であって、そこから稜線沿いに道を登ると、左右に坊舎などの家々が並び、その最も奥に敏満寺の本拠がおかれ、さらにその背後には精神的な紐帯でありランドマークともなった青竜山が配されていたという景観になるのではないだろうか。

図33 中世後期の根来寺坊院
菅原正明 1991「根来寺出土の備前焼大甕と流通ルート」『海と列島文化』第9巻

この景観は、あるいは勝山館や根城と対比できるかもしれないが、中世の寺院がもっていた多彩な側面としては、やはり南北朝期以降、大伝法院座主が醍醐寺三宝院門跡の相伝となり、幕府と緊密な関係を結ぶ中で、戦国期には八千から一万という行人方と呼ばれる僧兵集団によって独自の立場をつくりあげていった根来寺とも対比することが可能であり(図33)、とくにこの寺の特異な再生産構造については、甕倉の発見を軸に検討を加えた菅原正明氏の論考に見ることができ(93)。また同様な事例として福井県の白山と平泉寺(図34)についての宝珍伸一郎氏の整理も重要である(94)。

中世社会に対して寺社勢力の果たした役割の大きさについては、既に豊田武氏や網野善彦氏に代表されるような神人の活躍に注目した研究があったが、近年は馬淵和雄氏に代表されるような、特定の宗派にその役割を求め、それと考古学的な現象との関連について解釈を進めようとする研究も発表され、また松山宏氏の先駆的な研究をふまえ、山村信榮氏の復原する中世の太宰府や仁木宏氏によって大山崎をフィールドに

図34 平泉寺旧境内概要図(宝珍伸一郎、註94)

おこなわれた宝積寺の分析など、寺院と都市との関わりに注目した研究もすすめられてきている(99)。

そんな中、伊藤正敏氏は中世における権門諸勢力の中で、寺院における宗教的な側面とは別に寺社がもっていた様々な影響力を、その境内都市を中心とする社会の中から見いだそうとする方向を提示し、中世の京都は比叡山の境内都市であると(100)。この見方は、先に述べてきた瓦器碗と石清水との関係に対比されるものとしての、京都型土師器皿(かわらけ)の分布の説明と現象的には整合するものであり、それが一般論としての都市と寺社勢力の関係を考える際のすべについても有効かどうか、近年の中世考古学の研究成果は、敏満寺・根来寺・平泉寺など、かなりの部分でその議論のための検討材料を提供してきており、今後はこの視点での検討を深める必要があるだろう。

しかるに少なくともこれまでみてきたように、中世の寺社勢力が、氏の表現するところの「多元的全体社会」を、多変量解析的に説明する際の最も大きな要素であることは確かであり、それは多様な価値観の集合体である都市の研究にとっても最も重要な視点であると考えられる。

小論は、中世の京都がもっていた多様な側面を考古学の立場から考えていくために、京都の特質を京都以外の地域との関係の中から逆に浮かび上がらせる方法をとってきたが、その結果、京都と京都以外の地域を結びつけていた宗教的側面または寺社の果たしていた役割の大きさをあらためて確認することになったと考える。まだ多くは現象説明にとどまってはいるが、それが中世都市京都の特質のひとつであったと(101)言うことができるのであろうか。

しかしこの問題を進めるためには、小論でおこなった下京だけの分析では不十分であり、上京の中世についても考古学的な検討を加える必要がある。ところが図25で示したように、上京地区での調査はほとんどおこなわれておらず、唯一最もその地域に近いのが同志社大学の今出川キ

キャンパス関連の資料になっている。

これまで同志社大学ではキャンパス内の調査成果について調査地点毎に報告書を刊行し、資料の公開を進めてきたが、⁽¹⁰⁾ 今後はそれらを統合したデータの整理をすすめなければならない。考古学的な調査成果を活かした中世都市京都の総合的な検討をおこなうために、GISによる調査地点データの精度を高めると同時に、現在それが急務の課題となっている。

本稿の作成に際して、浅野晴樹・飯村均・上野武・大道和人・小島孝修・櫻井成昭・高橋照彦・鷹野一太郎・五百磐頭一・中村智孝・原田昭一・水ノ江和同・馬淵和雄・八十島豊成・山田邦和・山口博之・山村信榮・吉岡康暢の各氏よりご教示をいただいた。深く御礼を申し上げます。

註

- (1) 鋤柄俊夫 一九九四「大坂城下町にみる都市の中心と周縁」『都市空間』(中世都市研究1) 新人物往来社。鎌倉での研究成果は、鎌倉考古学研究所『中世都市鎌倉を掘る』日本エディタースクール出版部 一九九四ほか。
- (2) 申叔舟著・田中健夫訳注 一九九一『海東諸国紀』(岩波文庫)。京都市内の遺物からみたヴァーチヤルな都市京都全体の研究は、拙著『中世村落と地域性の考古学的研究』(大巧社 一九九九)でまとめている。またかつて拙稿(『平安京土師器皿の諸問題』『平安京出土土器の研究』古代学研究所 一九九四)の中で、土師器皿の出土状況の分析からこの視点の重要性を述べたことがある。
- (3) 山田邦和 一九九八「中世都市京都の変容」『都市をつくる』(中世都市研究5) 新人物往来社
- (4) 鋤柄俊夫 一九九九「狭山池と中世村落の変容」『狭山池』(論考編) 狭山池調査事務所。そのイメージはあたかもブローデルの『地中海』を想起させる。
- (5) なおこの点については、巨椋池北岸までを視野に入れ、鳥羽・醍醐・伏見が時代毎に「京の前浜」としての役割を果たした可能性を考えている。別稿で詳述したい。
- (6) 京田辺市教育委員会 一九九九『新遺跡現地説明会資料』
- (7) 黒田俊雄 一九七五『日本中世の国家と宗教』岩波書店
- (8) 『一遍聖絵』にみえる関寺・備後一の宮など
- (9) 網野善彦 一九八八「中世前期における職能民の存在形態」『日本中世史研究の軌跡』東京大学出版会
- (10) 八幡市 一九八六『八幡市史』第1巻。平凡社 一九八一「京都府の地名」(日本歴史地名大系26)。伊藤清郎 一九七六「中世前期における石清水八幡宮の権力と機構」『文化』第40巻第1・2号 東北大学文学会。
- (11) 石清水八幡宮 一九八四「史跡松花堂およびその跡発掘調査概報」
- (12) 八幡市教育委員会 一九八五「平野山瓦窯跡発掘調査概報」
- (13) 八幡市教育委員会 一九九八「八幡市埋蔵文化財発掘調査概報」第25集
- (14) 八幡市教育委員会 一九九六「八幡市埋蔵文化財発掘調査概報」第19集
- (15) 粟野諒 一九五六「志水庵寺出土の瓦器」『古代学研究』15・16号
- (16) 星野敏二 一九五六「石清水八幡宮出土の須恵質皿」『古代学研究』15・16号
- (17) 八幡市教育委員会 一九九八「八幡市埋蔵文化財発掘調査概報」第24集
- (18) 藤原良章 一九八八「中世の食器・考」『列島の文化史』5 日本エディタースクール出版部
- (19) 鋤柄俊夫 一九九五「用途にみる土器文化の地域性」『帝京大学山梨文化財研究所報』第25号
- (20) 橋本久和 一九九二「中世土器研究序論」真陽社。なお氏は「中世男山々籠の流通拠点」(一九九九「研究紀要」第2号 大阪市文化財協会)のなかで、従来よりの資料整理を進めることにより、この地が北部九州から京都へ入ってくるに際しての大きな流通拠点であったことをあらためて指摘している。さらにその背景に踏み込んだ考察が期待される。
- (21) 吉岡康暢 一九九七「新しい交易体系の成立」『交易と交通』(考古学による日本歴史9) 雄山閣
- (22) 森田勉 一九七三「九州地方の瓦器碗について」『考古学雑誌』(第五九巻第2号)
- (23) 九州古文化研究会 一九八四「古文化談叢」第14集
- (24) 佐藤浩司 一九九一「旧豊前国における古代末から中世前期の土器様相」『中近世土器の基礎研究』Ⅶ
- (25) 中島恒次郎 一九九二「大宰府における碗形態の変遷」『中近世土器の基礎研究』Ⅷ
- (26) 森隆 一九九二「中世土器の生産にみる地域型の提唱と工人集団の系譜について」『中近世土器の基礎研究』Ⅷ
- (27) 森隆 一九九三「土器碗の生産と流通」『中近世土器の基礎研究』Ⅸ
- (28) 鋤柄俊夫 一九九九「中世村落と地域性の考古学的研究」大巧社
- (29) 添田町教育委員会 一九八五『英彦山修験道遺跡』
- (30) 飯沼賢司 一九九三「権門としての八幡宮寺の成立」『中世成立期の歴史像』東

- 京堂出版。西岡虎之助 一九二八「中古における宇佐神人の活動」『史林』第13巻第1〜4号。中野幡能 一九六七「八幡信仰史の研究」吉川弘文館。大場磐雄編 一九七二「弥勒寺跡」『祭祀遺跡特説』(神道考古学講座 第5巻) 雄山閣。飯沼賢司 一九五五「鍛冶の翁」と「炭焼小五郎」伝説の実像」『東シナ海を囲む中世世界』新人物往来社
- (31) 中山重記 一九八一「宇佐宮領における均等名庄園について」・河野泰彦 一九八一「弥勒寺領豊後国八坂荘について」『九州中世社会の研究会』渡辺澄夫先生古希記念事業会。櫻井成昭 一九九九「古代・中世の香々地」『豊後国香々地荘の調査』大分県立歴史博物館
- (32) 大分県宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 一九八九「弥勒寺」。神事に使われた土器については、小柳和宏 一九九五「宇佐の神に捧げた土器」『東シナ海を囲む中世世界』新人物往来社、も参考になる。
- (33) 鋤柄俊夫 一九九九「中世村落と地域性の考古学的研究」大巧社
- (34) 千々和実 一九八七「八幡信仰と経塚の発生」『墳墓と経塚』(日本考古学論集 6) 吉川弘文館。すでに石田茂作氏はその造営背景を修験者による勧進活動と関連づけているが(石田茂作 一九五七「越中石寺裏山経塚」『考古学雑誌』42-4)、最近村木二郎氏は観世音寺との関係および鑄物師集団との関係にも注目している(村木二郎 一九九八「九州の経塚造営体制」『古文化談叢』第40集 九州古文化研究会)
- (35) 藤原良章 一九八八「中世の食器・考」『列島の文化史』5 日本エディタースクール出版部
- (36) 鋤柄俊夫 一九九九「中世村落と地域性の考古学的研究」大巧社
- (37) 浅野晴樹 一九九一「東国における中世在地系土器について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第31集
荒川正夫 一九九八「中世前期の「かわらけ」の意味」『大久保山』VI 早稲田大学
- (38) 飯村均 一九九七「平泉から鎌倉へ」『宴をめぐる日本文化の歴史的综合研究』(財団法人サントリ文化財団一九九六年度研究助成報告) 生活史研究所
- (39) 吉岡康暢 一九九七「総括」『中世食文化の基礎的研究』(国立歴史民俗博物館研究報告) 第71集
- (40) 脇田晴子 一九九七「文献からみた中世の土器と食事」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集
- (41) 吉岡康暢 一九八七「中世陶器の生産経営形態」『国立歴史民俗博物館研究報告』第12集
- (42) 吉岡康暢 一九九〇「珠洲焼から越前焼へ」『海と列島文化』第1巻 小学館
- (43) 網野善彦 一九九二「太平洋の海上交通と紀伊半島」『伊勢と熊野の海』(海と列島文化8) 小学館
- (44) 網野善彦 一九八八「中世前期における職能民の存在形態」『日本中世史研究の軌跡』東京大学出版会
網野善彦 一九九四「日本社会再考」小学館
- (45) 平凡社 一九九一「滋賀県の地名」(日本歴史地名大系25)
- (46) 飯村均 一九九七「平泉から鎌倉へ」『宴をめぐる日本文化の歴史的综合研究』(財団法人サントリ文化財団一九九六年度研究助成報告) 生活史研究所。また平泉が日本海側の文化と関係する可能性については、白山社を介在した事例が知られていることを上野武氏よりご教示いただいた(井上正 一九八六「美濃・石徹白虚空蔵菩薩坐像と秀衡伝説」『仏教芸術』)。この意味するところはあらためて詳述したい。
- (47) 遊佐町教育委員会 一九九一「大桶遺跡第3・4次発掘調査報告書」
伊藤邦弘 一九九六「遊佐荘大桶遺跡について」『月刊歴史手帖』第24巻10号
- (48) 河野真知郎 一九九六「遊佐荘大桶遺跡と鎌倉」飯村均・八重樫忠郎 一九九六「大桶遺跡再考」『月刊歴史手帖』第24巻10号
- (49) 豊田武 一九五一「中世における神人の活動」『東北大学文学部研究年報』第1号。網野善彦 一九八八「中世前期における職能民の存在形態」『日本中世史研究の軌跡』東京大学出版会。大山喬平 一九八八「供御人・神人・寄人」『社会的諸集団』(日本の社会史 第6巻) 岩波書店。
- (50) 鋤柄俊夫 一九九九「中世村落と地域性の考古学的研究」大巧社
- (51) 平安京から中世京都を考古学資料を軸に総括的にまとめた研究は堀内明博氏の著作に代表される。(ミヤコを掘る) 淡交社 一九九五) また平安京・京都研究会では一九九五年より、墓・路・空間構造など都市京都を総括した研究報告がなされている。(山田邦和氏の「京都の都市空間と墓地」『日本史研究』No.四〇九 一九九六、山本雅和氏の「中世京都の堀について」『研究紀要』第二号 京都市埋蔵文化財研究所 一九九五。「平安京の路について」『立命館大学考古学論集』I 一九九七) などその成果の一部である。京都駅周辺地区の調査については、網伸也・山本雅和「平安京左京八条三坊の発掘調査」『日本史研究』No.四〇九 一九九六。朝日新聞社「京都を掘る」(シリーズ二〇 都市の考古学)『アサヒグラフ』通巻三九四四号 一九九七
- (52) 野口実「京都七条町の中世の展開」『京都文化博物館(仮称) 研究紀要』第1集 一九八八
- (53) 川嶋将生・横井清「三 京とその周辺」『京都の歴史』2 京都市 一九七二
- (54) 仲村研「八条院町の成立と展開」『京都「町」の研究』(秋山國三共著) 法政大学出版局 一九七五。川嶋将生「東寺領八条院町の構造と生活」『中世京都文化の周縁』思文閣出版 一九九二

- (55) 平家による日宋貿易を前提として、中国陶磁器など、とくに西方との強いつながりを示唆する遺物が出土する点もこれと矛盾しない。
- (56) 京都市 一九八一「史料 京都の歴史」12(下京区)
- (57) 脇田晴子 一九八一「日本中世都市論」東京大学出版会
- (58) 川嶋将生・横井清「三 京とその周辺」『京都の歴史』2 京都市 一九七二
- (59) 京都市 一九八一「史料 京都の歴史」12(下京区)
- (60) 伊藤正敏 一九九九「中世の寺社勢力と境内都市」吉川弘文館。伊藤正敏 二〇〇〇「日本の中世寺院」吉川弘文館
- (61) 柴田実 一九七一「神社と民間信仰」『京都の歴史』2 京都市。なお祇園と神人との関係については、脇田晴子氏の近著の中でも述べられている(脇田晴子 一九九九「中世京都と祇園祭」中公新書)。
- (62) 石田善人 一九七一「浄土と禪」『京都の歴史』2 京都市
- (63) 藤井学 一九六八「新旧仏教の教線」『京都の歴史』3 京都市
- (64) 文化公報部・文化財管理局 一九八八「新安海底遺物」(総合篇)
- (65) 山本雅和 一九九五「中世京都の堀について」『研究紀要』第2号 京都市埋蔵文化財研究所
- (66) 山田邦和 一九九八「中世都市京都の変容」『都市をつくる』(中世都市研究5) 新人物往来社
- (67) 大瀬戸町教育委員会 一九八〇「大瀬戸町石鍋製作所遺跡」
- (68) 角川書店 一九八七「長崎県地名大辞典」角川日本地名大辞典42
- (69) 山本信夫・山村信栄 一九九七「九州・南西諸島」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集
- (70) 工藤清泰 一九九五「北日本の鉄製品」『帝京大学山梨文化財研究所報』第25号
- (71) 桐原健 一九七四「鍋を被せる葬風」『信濃』第26巻8号
- (72) 浅野晴樹氏のご教示による。
- (73) 鋤柄俊夫 一九九九「中世村落と地域性の考古学的研究」大巧社。吉岡康暢
- (74) 「食の文化」『岩波講座 日本通史』第8巻 中世2
- (75) 北区鎌倉学園内遺跡発掘調査団 一九八〇「光明寺裏遺跡」
- (76) 今小路西遺跡発掘調査団 一九九三「今小路西遺跡発掘調査報告書」
- (77) 千葉地遺跡発掘調査団 一九八二「千葉地遺跡」
- (78) 諏訪東遺跡調査会 一九八五「諏訪東遺跡」
- (79) 草戸千軒町遺跡調査研究所 一九九三「草戸千軒町遺跡発掘調査報告書」
- (80) 鎌倉駅舎改築にかかる遺跡調査会 一九八四「蔵屋敷遺跡」
- (81) 由比ヶ浜中世集団墓地遺跡発掘調査団 一九九四「由比ヶ浜4-6-9地点発掘調査報告書」
- (81) 佐助ヶ谷遺跡発掘調査団 一九九三「佐助ヶ谷遺跡(鎌倉税務署用地)発掘調査報告書」
- (82) 馬淵和雄 一九九八「鎌倉大仏の中世史」新人物往来社
- (83) 瀬野精一郎 一九八〇「中世編一および二の第一・三節」『長崎県史』(古代・中世編)長崎県史編集委員会
- (84) 大瀬戸町教育委員会 一九八〇「大瀬戸町石鍋製作所遺跡」。下川達彌 一九九五「生活を変えた職人たち」石鍋「東シナ海を囲む中世世界」新人物往来社。下川達彌 一九九二「西北九州の石鍋とその伝播」『東シナ海と西海文化』(海と列島文化4)小学館。なお石鍋の特異性に注目した研究は既に明治時代よりおこなわれており、経塚製作のメカニズムと石鍋を同じ系譜で捉える視点は再考が必要だが、宗教性や中央とのつながりにについても示唆されてきた部分がある(木戸雅寿 一九九三「石鍋の生産と流通について」『中近世土器の基礎研究』IXほか)。
- (85) 村野浩ほか 一九九三「元箱根石仏・石塔群の調査」箱根町教育委員会
- (86) 川勝政太郎 一九六七「石造美術入門」社会思想社
- (87) 三輪茂雄 一九九四「増補 石臼の謎」クオオリ
- (88) 千々和実 一九七六「板碑」『塔・塔婆』(新版仏教考古学講座 第3巻)雄山閣出版
- (89) 馬淵和雄 一九九八「鎌倉大仏の中世史」新人物往来社
- (90) 三上隆 一九八七「渡来銭の社会史」中公新書
- (91) 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 一九八八「敏満寺遺跡発掘調査報告書」。滋賀県教育委員会 一九六一「敏満寺跡発掘調査報告」『滋賀県史跡調査報告』第12冊。多賀町教育委員会 一九九四「久徳遺跡(第3次調査)・敏満寺遺跡」(多賀町埋蔵文化財発掘調査報告書 第9集)。平凡社 一九九一「滋賀県の地名」(日本歴史地名大系25)
- (92) 上ノ国町教育委員会 一九九九「海峡がたぐ地域史を掘る」
- (93) 菅原正明 一九九一「根来寺出土の備前焼大甕と流通ルート」『瀬戸内の海人文化』(海と列島文化 第9巻)小学館。平凡社 一九八三「和歌山県の地名」(日本歴史地名大系31)
- (94) 宝珍伸一郎 一九九九「白山信仰の遺跡」『考古学に学ぶ』(同志社大学考古学シリーズ7)
- (95) 豊田武 一九五一「中世における神人の活動」『東北大学文学部研究年報』第1号。網野善彦 一九八八「中世前期における職能民の存在形態」『日本中世史研究の軌跡』東京大学出版会。
- (96) 馬淵和雄 一九九八「鎌倉大仏の中世史」新人物往来社。『観尊・忍性と律宗系集団』(二〇〇〇シンポジウム「観尊・忍性と律宗系集団」実行委員会)
- (97) 松山宏 一九九一「中世城下町の研究」近代文芸社

(98) 山村信栄 一九九七「中世太宰府の展開」『都市と宗教』(中世都市研究4)新
人物往来社

(99) 仁木宏 一九九二「中世都市大山崎の展開と寺院」『史林』75巻3号

(100) 伊藤正敏 一九九九「中世の寺社勢力と境内都市」吉川弘文館

(101) 同志社大学校地学術調査委員会 一九七八「キャンパス内の遺構と遺物」IIほ
か

(同志社大学歴史資料館・国立歴史民俗博物館研究協力者)

(二〇〇一年四月二十八日受理、二〇〇一年六月二十二日審査終了)

-
- | | |
|-----------------------------------|----------------------|
| 107.京都市内遺跡試掘調査概報平成10年度 | 1999 京都市文化市民局 |
| 108.京都市内遺跡発掘調査概報平成10年度 | 1999 京都市埋蔵文化財研究所 |
| 109.平成7年度京都市埋蔵文化財調査概要 | 1997 京都市埋蔵文化財研究所 |
| 110.平成8年度京都市埋蔵文化財調査概要 | 1998 京都市埋蔵文化財研究所 |
| 111.京都大学構内遺跡調査研究年報56年度 | 1983 京都大学埋蔵文化財研究センター |
| 112.京都大学構内遺跡調査研究年報57年度 | 1984 京都大学埋蔵文化財研究センター |
| 113.京都大学構内遺跡調査研究年報58年度 | 1986 京都大学埋蔵文化財研究センター |
| 114.京都大学構内遺跡調査研究年報1987年度 | 1990 京都大学埋蔵文化財研究センター |
| 115.京都大学構内遺跡調査研究年報1986年度 | 1989 京都大学埋蔵文化財研究センター |
| 116.京都大学構内遺跡調査研究年報55年度 | 1981 京都大学埋蔵文化財研究センター |
| 117.左京5条3坊8町 | 1997 古代学協会 |
| 118.昭和60年度京都市埋蔵文化財調査概要 | 1988 京都市埋蔵文化財研究所 |
| 119.左京8条2坊14町・15町現地説明会資料 | 1997 京都市埋蔵文化財研究所 |
| 120.京都市埋蔵文化財研究所概報集1978-I | 1978 京都市埋蔵文化財研究所 |
| 121.「平安京左京八条三坊の発掘調査」『日本史研究』No.409 | 1996 網伸也・山本雅和 |
-

63. 平安京跡発掘調査報告	1977 平安京調査会
64. 鳥羽離宮跡発掘調査概報平成5年度	1994 京都市埋蔵文化財研究所
65. 鳥羽離宮跡発掘調査概報平成2年度	1990 京都市埋蔵文化財研究所
66. 鳥羽離宮跡発掘調査概報昭和62年度	1988 京都市埋蔵文化財研究所
67. 平安京左京4条4坊4町	1993 京都文化博物館
68. 埋蔵文化財発掘調査概報	1980 京都府教育委員会
69. 平安京左京8条3坊	1982 京都市埋蔵文化財研究所
70. 京の公家屋敷と武家屋敷	1994 同志社大学校地学術調査委員会
71. 大本山相国寺境内の発掘調査	1984 承天閣美術館
72. 大本山相国寺境内の発掘調査Ⅱ	1988 同志社大学校地学術調査委員会
73. 公家屋敷二条家北辺地点の調査	1983 同志社大学校地学術調査委員会
74. 同志社構内地下鉄烏丸線今出川地点の発掘	1981 同志社大学校地学術調査委員会
75. 同志社中学校校地内発掘調査概要	1975 同志社大学校地学術調査委員会
76. 同志社高等学校理科館改築に伴う埋蔵文化	1991 同志社大学校地学術調査委員会
77. 同志社大学新町校地発掘調査概報	1974 同志社大学校地学術調査委員会
78. 六角町遺跡調査概報	1976 同志社大学校地学術調査委員会
79. 相国寺旧寺域内の発掘調査	1977 成安女子短期大学
80. 同志社大学旧有隣館跡地発掘調査概要	1975 同志社大学校地学術調査委員会
81. 姥柳町遺跡(南蛮寺)調査概報	1973 同志社大学校地学術調査委員会
82. 公家屋敷二条家東辺地点の調査	1988 同志社大学校地学術調査委員会
83. 常磐井殿町遺跡発掘調査概報	1978 同志社大学校地学術調査委員会
84. 徳照館地点・新烏会館地点の発掘調査	1990 同志社大学校地学術調査委員会
85. 今出川校地電話配線替に伴う発掘調査概要	1976 同志社大学校地学術調査委員会
86. 同志社女子大学図書館建設予定地発掘調査	1976 同志社大学校地学術調査委員会
87. 仁和寺境内発掘調査報告	1990 京都市埋蔵文化財研究所
88. 妙心寺境内地の調査	1985 花園大学
89. 花園大学構内調査報告Ⅲ	1989 花園大学
90. 龍谷大学構内発掘調査報告書	1980 龍谷大学
91. 平安京跡発掘調査報告昭和55年度	1981 京都市埋蔵文化財センター
92. 京都市埋蔵文化財研究所概報集1977-I	1977 京都市埋蔵文化財研究所
93. 京都市埋蔵文化財研究所概報集1978-II	1978 京都市埋蔵文化財研究所
94. 平安京跡発掘調査概報昭和56年度	1982 京都市文化観光局
95. 左京四条一坊	1975 平安京調査会
96. 京都市埋蔵文化財研究所調査報告第10冊	1990 京都市埋蔵文化財研究所
97. 京都市内遺跡試掘・立会調査報告昭和54年	1980 京都市文化観光局
98. 京都市内遺跡試掘立会調査概報昭和59年度	1985 京都市文化観光局
99. 京都大学構内遺跡調査研究年報昭和52年度	1978 京都大学埋蔵文化財研究センター
100. 京都大学構内遺跡調査研究年報昭和55年度	1981 京都大学埋蔵文化財研究センター
101. 京都大学構内遺跡調査研究年報昭和54年度	1980 京都大学埋蔵文化財研究センター
102. 京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ	1981 京都大学埋蔵文化財研究センター
103. 京都市内遺跡立会調査概報平成9年度	1998 京都市文化市民局
104. 京都市内遺跡立会調査概報平成10年度	1999 京都市文化市民局
105. 京都市内遺跡試掘調査概報平成8年度	1997 京都市文化市民局
106. 京都市内遺跡試掘調査概報平成9年度	1998 京都市文化市民局

19. 京都府遺跡調査概報第59冊	1994 京都府埋蔵文化財調査研究センター
20. 京都府遺跡調査概報第54冊	1993 京都府埋蔵文化財調査研究センター
21. 京都府遺跡調査概報第52冊	1993 京都府埋蔵文化財調査研究センター
22. 京都府遺跡調査概報第48冊	1992 京都府埋蔵文化財調査研究センター
23. 京都府遺跡調査概報第45冊	1991 京都府埋蔵文化財調査研究センター
24. 京都府遺跡調査概報第33冊	1989 京都府埋蔵文化財調査研究センター
25. 昭和62年度京都市埋蔵文化財調査概要	1991 京都市埋蔵文化財研究所
26. 昭和63年度京都市埋蔵文化財調査概要	1993 京都市埋蔵文化財研究所
27. 昭和61年度京都市埋蔵文化財調査概要	1989 京都市埋蔵文化財研究所
28. 昭和59年度京都市埋蔵文化財調査概要	1987 京都市埋蔵文化財研究所
29. 平安京跡発掘調査概報平成2年度	1991 京都市文化観光局
30. 平安京跡発掘調査概報平成元年度	1990 京都市文化観光局
31. 京都市内遺跡立会調査概報平成5年度	1994 京都市文化観光局
32. 昭和57年度京都市埋蔵文化財調査概要	1983 京都市埋蔵文化財研究所
33. 平安京六角堂の発掘調査	1975 古代学協会
34. 左京四条三坊十三町	1984 古代学協会
35. 法住寺殿跡	1984 古代学協会
36. 左京三条三坊十一町	1984 古代学協会
37. 左京七条三坊五町	1985 古代学協会
38. 左京八条三坊二町—第2次調査—	1985 古代学協会
39. 左京6条2坊6町	1986 古代学協会
40. 高倉宮・曇華院跡第4次調査	1987 古代学協会
41. 三条西殿跡	1983 古代学協会
42. 高倉宮・曇華院跡	1983 古代学協会
43. 平安宮朝堂院跡	1983 古代学協会
44. 東洞院大路・曇華院跡	1977 古代学協会
45. 押小路殿・左京3条3坊11町	1984 古代学協会
46. 西賀茂瓦窯跡	1978 古代学協会
47. 左京5条3坊15	1981 古代学協会
48. 大極殿跡の調査	1976 古代学協会
49. 土御門烏丸内裏	1983 古代学協会
50. 左京8条3坊2町	1983 古代学協会
51. 右京6条4坊9町・5条大路	1991 京都文化博物館
52. 右京5条2坊9町・10町	1991 京都文化博物館
53. 左京5条2坊16町	1991 京都文化博物館
54. 左京5条1坊皇嘉門大路	1990 京都文化博物館
55. 左京3条4坊4町	1988 京都文化博物館
56. 左京8条3坊7町	1988 京都文化博物館
57. 左京6条3坊7町	1995 京都文化博物館
58. 烏丸線内遺跡調査年報Ⅰ	1979 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会
59. 烏丸線内遺跡調査年報Ⅱ	1980 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会
60. 烏丸線内遺跡調査年報Ⅲ	1981 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会
61. 京都府遺跡調査概報第63冊	1995 京都府埋蔵文化財調査研究センター
62. 京都府遺跡調査概報第54冊	1993 京都府埋蔵文化財調査研究センター

442. ①AP22②③④⑤ 鑄造遺構⑥SK225埋甕墓群⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬112
 443. ①AF15②③④SX2⑤⑥SE2東海掬鉢・白磁四耳壺⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬112
 444. ①AT29②③④⑤⑥SK14・SK1・石鍋⑦⑧⑨SK21⑩⑪⑫⑬113
 445. ①BE33②③④⑤⑥ 包含層⑦包含層⑧⑨⑩⑪⑫⑬113
 446. ①AN20②③④⑤⑥SE3、SK1備前甕⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬113
 447. ①AL20②③④⑤ 包含層・四耳壺・青白磁合子・埴塙・鑄型⑥包含層⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬114
 448. ①BD33②③ 緑釉・土器④土器⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬114
 449. ①AJ18②③④⑤SE24⑥E13・山茶碗⑦SE27⑧⑨⑩⑪⑫⑬115
 450. ①AX30②③④⑤⑥ 包含層⑦⑧ 包含層⑨⑩⑪⑫⑬115
 451. ①AT27②③④ 木棺墓SK3⑤SD3⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬116
 452. ①左京5条3坊8②③溝④⑤土坑132・石鍋⑥土坑140・62・石鍋⑦土坑36、常滑多数・埋甕倉庫?⑧井戸45・青銅柄杓、方形竪穴⑨土坑5⑩井戸107⑪井戸107⑫⑬117
 453. ①左京3条2坊10②③④井戸11・12⑤井戸5・10、池状遺構⑥⑦⑧井戸9⑨土坑3・土師器皿数千枚⑩井戸3⑪井戸2⑫堀河院⑬118
 454. ①左京4条4坊5②土坑14③④⑤⑥⑦遺構⑧⑨⑩⑪⑫⑬118
 455. ①左京8条3坊7②③井戸ほか④遺構多数⑤遺構最多、井戸6・8輸入磁器多数・褐釉壺・漆器⑥井戸22基⑦落ち込20・鑄型・漆器、方形板組墓?⑧火床・有孔セン、土坑73墓?⑨集積溝状、集積墓群⑩耕作地⑪耕作地⑫奈良時代井戸⑬118
 456. ①左京9条3坊13②③④⑤⑥⑦耕作地⑧⑨⑩⑪⑫⑬118
 457. ①右京2条3坊1②SG1③SD42、SK262鋤・鍬先埋納④⑤⑥⑦耕作地⑧耕作地⑨⑩⑪⑫⑬118
 458. ①北野烏居前町遺跡②③④⑤⑥⑦⑧SE71⑨⑩⑪⑫⑬118
 459. ①左京8条2坊14②③④⑤⑥⑦鑄造炉・礫敷き・ゆりもの⑧⑨⑩⑪⑫⑬119
 460. ①左京8条3坊②河川③河川④井戸⑤井戸・埴塙・鑄型⑥墓⑦墓⑧⑨⑩⑪⑫⑬120

京都市内遺跡調査関係文献リスト

書名	発行年	発行元
1. 平成元年度京都市埋蔵文化財調査概要	1994	京都市埋蔵文化財研究所
2. 京都市内遺跡立会調査概報平成5年度	1994	京都市埋蔵文化財研究所
3. 京都市内遺跡立会調査概報平成4年度	1993	京都市埋蔵文化財研究所
4. 京都市内遺跡試掘調査概報平成4年度	1993	京都市埋蔵文化財調査センター
5. 京都市内遺跡立会調査概報平成3年度	1992	京都市埋蔵文化財研究所
6. 京都市内遺跡試掘調査概報平成3年度	1992	京都市埋蔵文化財調査センター
7. 京都市内遺跡試掘立会調査概報平成2年度	1990	京都市埋蔵文化財研究所
8. 京都市内遺跡試掘立会調査概報平成元年度	1989	京都市文化観光局
9. 平成4年度京都市埋蔵文化財調査概要	1995	京都市埋蔵文化財研究所
10. 平成3年度京都市埋蔵文化財調査概要	1995	京都市埋蔵文化財研究所
11. 平成2年度京都市埋蔵文化財調査概要	1994	京都市埋蔵文化財研究所
12. 平成8年度京都市内遺跡発掘調査概報	1997	京都市埋蔵文化財研究所
13. 京都市内遺跡立会調査概報平成8年度	1997	京都市埋蔵文化財研究所
14. 京都市内遺跡立会調査概報平成7年度	1996	京都市埋蔵文化財研究所
15. 京都市内遺跡試掘調査概報平成6年度	1995	京都市埋蔵文化財調査センター
16. 京都市内遺跡立会調査概報平成6年度	1995	京都市埋蔵文化財研究所
17. 平安京右京3条3坊	1990	京都市埋蔵文化財研究所
18. 平安京右京6条1坊	1992	京都市埋蔵文化財研究所

403. ①左京6条3坊9 ②③④⑤⑥⑦埋甕墓?備前?土師器Ⅲ⑧⑨⑩⑪⑫⑬106
404. ①右京9条2坊8 ②③④井戸1・瓦器⑤井戸2・白磁四耳壺⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬106
405. ①左京5条3坊3 ②③土坑1 ④⑤⑥⑦包含層⑧⑨⑩⑪⑫⑬107
406. ①平安神宮②③東西溝④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬107
407. ①鞍馬蓄銭②③④⑤⑥⑦曲げ物⑧⑨⑩⑪⑫⑬108
408. ①山科本願寺跡②③④⑤⑥⑦⑧⑨土壘⑩⑪⑫⑬108
409. ①釜所②井戸144③井戸144④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬109
410. ①左京北辺3坊②③④⑤⑥土坑435白磁四耳壺⑦土坑196・197土器溜まり・墓?⑧柵・礫敷・土坑・L字溝⑨柵・礫敷・土坑・L字溝⑩柵・溝・園地・金箔瓦⑪柵・溝・園地・金箔瓦⑫⑬109
411. ①左京7条2坊②③④溝⑤井戸・石鍋⑥⑦⑧池⑨流路⑩庭園池⑪⑫⑬109
412. ①左京8条2坊②SK450③④井戸・土坑⑤SK335焼け石方形竪穴・SK569炉?・SE428・鏡鑄型・羽口・鏡・SK271常滑埋甕⑥井戸・土坑⑦井戸・土坑⑧耕作地⑨耕作地⑩耕作地⑪耕作地⑫⑬109
413. ①右京2条2坊②建物・大型緑釉・土馬③耕作地④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬109
414. ①朱雀大路②③④⑤流路⑥流路⑦流路⑧流路⑨⑩⑪⑫⑬109
415. ①右京6条1坊②SE156・建物③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬109
416. ①豊楽院跡②SD19③SD19④⑤⑥⑦⑧SD3⑨⑩⑪⑫⑬110
417. ①中和院跡②包含層③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬110
418. ①太政官跡②③包含層④⑤⑥⑦⑧遺構⑨⑩⑪⑫⑬110
419. ①朱雀大路②③④⑤湿地⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬110
420. ①左京7条2坊②③④⑤⑥⑦⑧包含層⑨⑩⑪⑫⑬110
421. ①左京8条2坊②SX310池緑釉③④SD134⑤⑥SK68鏡・仏具鑄型⑦SK144木棺墓⑧耕作地⑨⑩⑪⑫西洞院大路に面した墓⑬110
422. ①左京8条2坊②③④SD134⑤⑥埴塼・鏡鑄型⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬110
423. ①左京8条3坊②流路・緑釉③流路・緑釉④⑤鏡鑄型・石鍋・焼けた壁⑥⑦井戸16青磁香炉など・鏡鑄型・錢鑄型・石鍋⑧耕作地⑨⑩⑪⑫⑬110
424. ①左京8条3坊②③湿地④SD1000⑤SD1000⑥⑦SD555・建物・井戸・漆器大量・箸・土師器埋納・埋甕備前・L字溝・柿経⑧⑨⑩⑪⑫⑬110
425. ①右京1条3坊②遺構③溝202・墨書④溝236⑤⑥⑦⑧⑨溝95幅3.6m濠?⑩⑪⑫石鍋⑬110
426. ①法金剛院②包含層③包含層④礎石⑤池⑥池⑦池⑧⑨⑩⑪⑫地鎮銭⑬110
427. ①右京2条3坊②③建物④土師器一括土坑・井戸⑤⑥⑦⑧SE81⑨⑩⑪⑫⑬110
428. ①右京3条1坊②姉小路北溝③姉小路北溝④朱雀大路西側溝⑤朱雀大路西側溝⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬110
429. ①右京6条1坊②邸宅③SD20④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬110
430. ①北野廃寺②建物③④⑤⑥⑦⑧建物⑨⑩⑪⑫⑬110
431. ①京大構内②③④土器溜井戸369・高麗青磁梅瓶⑤屋敷⑥⑦土器埋納・建物⑧耕作地⑨耕作地⑩⑪⑫鑄造遺物⑬110
432. ①下三栖遺跡②③④⑤建物・墓⑥建物・溝・鍋一括・瓦器碗多数⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬110
433. ①鳥羽離宮140②③④白河天皇陵濠⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬12
434. ①太政官跡②③④溝⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬13
435. ①左京5条2坊2 ②③ピット④建物・緑釉土塔⑤土坑⑥土坑22⑦土坑34⑧土坑29⑨土坑47⑩土坑5 ⑪土坑11⑫⑬13
436. ①右京1条2坊12②建物・溝③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬13
437. ①豊楽院跡②包含層③包含層④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬14
438. ①職御曹司跡②土坑③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬16
439. ①右京北辺2坊7 ②溝・土坑・緑釉壺③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬16
440. ①AX28②③④⑤SK51⑥SK51⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬111
441. ①AO21②③④⑤SE6・四耳壺⑥SE3⑦SK4土壘墓⑧⑨⑩⑪⑫⑬112

-
359. ①左京4条3坊②③土坑・緑釉香炉④⑤土坑・瓦器⑥⑦土坑・青磁⑧⑨⑩⑪⑫⑬97
360. ①左京5条2坊②③④⑤⑥同安青磁⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬97
361. ①左京5条3坊②③④⑤遺構⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬97
362. ①左京5条4坊②③包含層④土坑・山茶碗⑤⑥⑦⑧土坑⑨⑩⑪⑫⑬97
363. ①左京5条4坊②③④⑤白磁⑥⑦⑧包含層⑨⑩⑪⑫⑬97
364. ①左京7条3坊②③④⑤⑥⑦⑧墓⑨⑩⑪⑫⑬97
365. ①左京7条3坊②③④⑤⑥⑦墓・四耳壺⑧⑨⑩⑪⑫⑬97
366. ①左京7条4坊②③④⑤⑥⑦墓⑧⑨⑩⑪⑫⑬97
367. ①左京8条2坊②③④土坑⑤⑥⑦落ち込み・石鍋・白磁・褐釉四耳壺⑧⑨⑩⑪⑫⑬97
368. ①左京8条1坊②③④⑤⑥包含層⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬97
369. ①右京1条2坊②③SD1④⑤⑥⑦⑧土坑1⑨⑩⑪⑫⑬97
370. ①右京1条3坊②包含層③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬97
371. ①右京5条2坊②③④⑤包含層⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬97
372. ①右京2条2坊②③土坑・灰釉・緑釉④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬97
373. ①右京5条2坊②③SK4・緑釉・灰釉④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬98
374. ①左京4条2坊②③④SK1⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬98
375. ①左京4条4坊②③④⑤⑥土坑⑦土坑⑧⑨⑩⑪⑫⑬98
376. ①左京5条3坊②③④⑤土坑⑥土坑⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬98
377. ①AF14②③④SE10⑤包含層⑥⑦⑧SD05⑨⑩⑪⑫石鍋⑬99
378. ①AP19②③④SK66⑤⑥SE1⑦SK53⑧⑨⑩⑪⑫⑬100
379. ①AT27②③④⑤SD3⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫墓2基⑬100
380. ①BG31②③土器④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬101
381. ①AW28②③④⑤⑥⑦土器⑧土器⑨⑩⑪⑫⑬101
382. ①白河北殿北辺②③④SD12⑤SK12・SD09・SE26⑥SD03・石鍋⑦SK08⑧SD24⑨⑩⑪⑫⑬102
383. ①左京3条3坊7②③④ピット⑤⑥⑦⑧⑨⑩池・鑄造関係⑪池・鑄造関係⑫⑬103
384. ①左京4条3坊8②③④包含層⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪落ち込み・華南三彩・蒔絵⑫⑬103
385. ①左京6条3坊②土坑・馬歯③6条大路④6条大路⑤6条大路⑥6条大路⑦6条大路⑧6条大路⑨⑩⑪⑫⑬103
386. ①右京1条2坊②包含層③包含層④溝⑤⑥道路⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬103
387. ①右京1条4坊2②③④⑤⑥⑦溝・土師器多数⑧⑨⑩⑪⑫⑬103
388. ①右京4条2坊①②溝③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪土居濠⑫⑬103
389. ①右京5条3坊4②宇多小路側溝③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬103
390. ①右京6条2坊①②野寺小路③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬103
391. ①北野遺跡②③SD16④SD4⑤SD3⑥⑦⑧SD19⑨⑩⑪⑫⑬103
392. ①法住寺殿跡②③④⑤溝⑥溝⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬103
393. ①太政官跡②③溝④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬104
394. ①左京1条4坊②③④⑤⑥⑦⑧⑨包含層⑩⑪⑫ヨーロッパ陶磁器⑬104
395. ①左京5条2坊8②③④⑤幅8.3mの濠・盤・鍋⑥⑦⑧井戸⑨⑩⑪⑫⑬104
396. ①左京5条3坊8②③④⑤包含層⑥墓?⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬104
397. ①右京1条2坊①②井戸③④幅5m濠?水路?⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬104
398. ①右京4条2坊①②SD2・3・羽口・スラグ③④SD15包含層⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫四条大路⑬104
399. ①右京3条2坊①②邸宅池・緑釉・越③邸宅池・緑釉・越④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬105
400. ①右京4条2坊①②包含層③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬105
401. ①聚楽第②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩濠⑪⑫⑬106
402. ①聚楽第②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩濠⑪⑫⑬106
-

316. ①相国寺境内②③④⑤⑥⑦井戸・山茶碗・常滑捏鉢⑧⑨⑩⑪⑫石鍋⑬72
317. ①黎明館地点②③④⑤⑥⑦SK111⑧ST201・202墓⑨SK211⑩⑪SK106⑫⑬73
318. ①今出川駅②③④⑤⑥⑦SK202・石鍋⑧SK205⑨SD302⑩SK311⑪⑫⑬74
319. ①中学校②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪鏡鑄型⑫⑬75
320. ①高等学校②③灰釉陶器④⑤⑥魚住⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬76
321. ①新町校地②③④⑤⑥⑦SD001⑧⑨⑩⑪⑫⑬77
322. ①六角町②③④緑釉⑤⑥青磁⑦瀬戸卸皿⑧土師器⑨⑩⑪⑫石鍋⑬78
323. ①成安女子学園②③④⑤⑥魚住⑦魚住⑧土坑⑨土坑⑩SD01⑪⑫⑬79
324. ①有隣館地点②③緑釉陰刻花文④瓦器碗⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫中世遺物⑬80
325. ①南蛮寺②③④瓦⑤⑥⑦⑧⑨土師器⑩硯・釜⑪⑫⑬81
326. ①幼稚園地点②③④⑤SX2001⑥SK1046・SK1091、四耳壺⑦⑧SK2094⑨SK1169⑩SE1008⑪⑫⑬82
327. ①常磐井殿町②③④⑤SK401⑥SK306・四耳壺・石鍋・盤⑦SE402⑧⑨⑩SX202⑪⑫⑬83
328. ①徳照館②③④⑤⑥⑦⑧SK301、瀬戸水注⑨⑩⑪SK202⑫近世鏡鑄型⑬84
329. ①新島会館②③緑釉・灰釉④SK318⑤⑥⑦⑧⑨⑩SK320⑪⑫⑬84
330. ①電話配管②③④⑤⑥⑦⑧土師器⑨⑩⑪⑫⑬85
331. ①女子大図書館②③④⑤⑥常滑⑦SK340⑧SE301⑨備前⑩⑪⑫⑬86
332. ①仁和寺境内②③灰釉・緑釉・越④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬87
333. ①ゆりかご保育園②③④⑤井戸⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬88
334. ①微妙殿②③④土御門大路⑤⑥土坑⑦⑧⑨⑩⑪⑫中世遺構⑬88
335. ①金牛院②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪井戸・漆器⑫⑬88
336. ①花園高校②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩土師器⑪⑫⑬88
337. ①花園高校②③④⑤⑥包含層⑦SX22・石鍋⑧⑨⑩⑪⑫⑬89
338. ①右京2条3坊10②建物・緑釉③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬89
339. ①清和館②③④⑤⑥⑦土師器・青磁・山茶碗⑧⑨⑩⑪⑫⑬90
340. ①中務省②SD1・建物③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬91
341. ①西雅院②土器・緑釉③④⑤⑥⑦⑧土器?⑨⑩⑪土器⑫⑬91
342. ①右京5条2坊②地鎮錢壺・西堀河小路③墓 SK3④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬91
343. ①西寺②建物・溝・築地③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬91・93
344. ①南禅寺②③④土器⑤魚住⑥土器⑦土器⑧備前⑨⑩⑪⑫⑬92
345. ①主水司②SK8・10・須恵器薬壺③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬93
346. ①左兵衛府②③SD1④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬93
347. ①高陽院②③SG1④⑤SG1⑥SG1⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬94
348. ①左京6条3坊②③④SF1⑤⑥⑦⑧⑨SD1⑩⑪SK1鑄型⑫⑬94
349. ①右京2条2坊②③SX1低湿地・天曆7緑釉・黒色④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬94
350. ①右京3条2坊②③SE4乾元大宝・建物④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬94
351. ①右京8条2坊②③④⑤⑥SD1・瓦器・魚住⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬94
352. ①壬生車庫②SE7③SE7④包含層⑤SE8・SK10・9・1、四条坊門小路SD3⑥四条坊門小路SD1・四耳壺⑦⑧⑨SK12⑩⑪⑫
石鍋⑬95
353. ①右京3条3坊②井戸・溝・硯多数③SE6④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬96
354. ①左京1条3坊②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫溝・青磁・瓦器鍋⑬97
355. ①左京3条3坊②③井戸④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬97
356. ①左京5条3坊②③④土坑⑤⑥⑦土坑・白磁皿⑧⑨⑩⑪⑫⑬97
357. ①左京6条2坊②③④⑤土坑・白磁四耳壺⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬97
358. ①左京2条4坊②③④⑤⑥⑦土師器一括⑧⑨⑩⑪⑫⑬97

280. ①No.64②③④⑤⑥土坑12⑦土坑13⑧土坑11⑨土坑群10⑩土坑9⑪⑫⑬60
281. ①No.65②③④落ち込み2⑤土坑6⑥土坑5・少ない⑦土坑3⑧石組遺構⑨土坑7⑩溝3⑪井戸2・5⑫⑬60
282. ①No.66②③ピット④土坑群⑤ピット⑥土坑6・7⑦井戸13・14・土坑8⑧井戸11・土坑3⑨井戸10・溝1⑩土坑⑪井戸7⑫⑬60
283. ①No.67②③井戸7④井戸7⑤ピット21⑥土坑15・17・青磁⑦土坑12⑧井戸5・6⑨土坑6・7⑩⑪土坑3⑫⑬60
284. ①No.68②ピット12③ピット94④土坑10⑤落ち込み6⑥土坑9・11⑦土坑2・3・7この地域を特徴付ける土坑群、遺物多彩、形一定⑧井戸8⑨土坑24・12⑩井戸6・7⑪⑫⑬60
285. ①No.69②流路緑釉香炉③④土坑10⑤土坑11⑥土坑15⑦井戸3・4・常滑甕⑧土坑3⑨⑩⑪⑫⑬60
286. ①No.70②③④⑤井戸1⑥土坑8⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬60
287. ①No.71②③井戸7④ピット群・井戸6⑤土坑群⑥土坑62・49・石鍋・磔など墓⑦土坑42墓⑧土坑40⑨土坑37墓数珠・土坑25石鍋⑩土坑減少⑪⑫⑬60
288. ①左京1条2坊14②土坑170・井戸231③④⑤⑥⑦⑧⑨土坑⑩⑪土坑8・42・備前甕・刷毛・金箔瓦⑫⑬61
289. ①No.72②③土坑④土坑83⑤ピット群、土坑73⑥磔土坑墓?青磁完形とか土釜とか砥石とか、井戸13・14・四耳壺・石鍋⑦磔土坑墓?土坑44土師器完形・埴塙・羽口・銭、井戸10・掘り込み2・青磁双魚文皿、褐釉水注、土坑39・山茶碗、石鍋⑧磔土坑墓?青磁完形とか土釜とか砥石とか、石鍋⑨井戸9・瀬戸花瓶・洞花瓶⑩井戸⑪⑫墓?が小単位で展開⑬60
290. ①No.73②包含層③井戸18④井戸・土坑⑤土坑55・中国品多数・石鍋、土坑44・銭多数・埴塙・砥石⑥土坑27墓・石鍋、土坑29・石鍋⑦土坑28・鑄型、土坑14・18・墓、土坑25・石鍋⑧土坑11・墓⑨濠⑩⑪⑫⑬60
291. ①No.74②包含層・瓦③井戸・緑釉④土坑⑤ピット群⑥ピット群⑦溝・ピット⑧土坑17墓、18・21墓⑨溝⑩⑪⑫⑬60
292. ①No.76②③④土坑16⑤⑥土坑13⑦⑧井戸2⑨濠4m⑩⑪⑫⑬60
293. ①No.77②③井戸17④溝2中国品多量⑤溝1⑥土坑50石鍋⑦土坑35⑧土坑29⑨井戸15⑩土坑17⑪⑫⑬60
294. ①No.78②③ピット57④井戸5⑤⑥⑦土坑9⑧⑨土坑群⑩井戸3⑪硯工房⑫⑬60
295. ①No.79②③④⑤⑥⑦⑧池状⑨池状⑩ピット⑪⑫⑬60
296. ①No.80②③土坑群④土坑群⑤土坑66・鉄生産、土坑75・銭121枚⑥土坑51⑦土坑28、76・滑石鍋⑧土坑28⑨土坑61・55皿釜一括墓?・銭37枚⑩⑪⑫⑬60
297. ①X-5②③ピット47④土坑9⑤土坑11⑥⑦井戸7⑧井戸10⑨⑩⑪⑫⑬60
298. ①F-2②③④土坑1⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬60
299. ①聚楽第跡②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩聚楽第濠⑪⑫⑬62
300. ①左京8条4坊②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫中世包含層⑬63
301. ①鳥羽139次②③④東殿庭園・仏像⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬64
302. ①鳥羽136次②③④⑤⑥井戸10⑦土坑97⑧土坑101⑨土坑53⑩⑪⑫⑬65
303. ①鳥羽122次②③④溝3・瓦器碗・土塔⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫白河陵石垣・瓦窯⑬66
304. ①鳥羽124次②③④⑤溝28魚住・瓦器・黄釉盤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬66
305. ①左京4条4坊4②③④⑤井戸202白磁合子⑥⑦墓380⑧土坑390⑨⑩溝354・土坑56・鏡鑄造⑪土坑227・鏡鑄造⑫埋甕⑬67
306. ①左京内膳町②③SK19④SE176⑤SE326⑥SK154⑦SE372⑧SE202B⑨SD41B⑩⑪SG08⑫⑬68
307. ①二条大路②③④包含層⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪SK38⑫⑬68
308. ①右京1条3坊9②邸宅③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬68
309. ①右京1条3坊9②邸宅③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬68
310. ①右京1条3坊9②邸宅③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬68
311. ①右京2条2坊5②土坑③包含層④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬68
312. ①左京8条3坊②包含層③整地層④溝・井戸⑤SD24中国多量、SD25・盤⑥SD28⑦SE1・四耳壺、SE5・河内釜・山茶碗・平碗・卸皿・瀬戸多い・埋甕・仏像・鑄型多数・銭鑄型・石鍋⑧磔敷蔵基礎⑨⑩⑪⑫⑬69
313. ①同静和館地点②③④⑤⑥⑦土坑70⑧⑨⑩⑪⑫⑬70
314. ①新島会館地点②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪土坑77⑫⑬70
315. ①相国寺境内②③緑釉④⑤⑥SD202・SK305、瀬戸水注⑦SK311⑧SK132⑨⑩⑪⑫羽口⑬71

237. ①No.33②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩土坑群⑪⑫⑬58
238. ①No.34②③土坑④焼土層Ⅱ⑤井戸5⑥井戸4⑦土坑7・9⑧土坑⑨⑩井戸⑪⑫⑬58
239. ①No.35②③④⑤⑥⑦土坑8・9⑧⑨土坑群⑩⑪⑫⑬58
240. ①No.36・37②③ピット36④溝2・3⑤土坑32・井戸⑥土坑34・井戸⑦土坑13・土師器皿埋納墓⑧埋甕墓群⑨土坑21・井戸⑩⑪⑫山茶碗⑬58
241. ①立-11②③土坑11④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬58
242. ①No.39②③包含層④⑤⑥⑦⑧⑨⑩溝3・井戸4・土坑4⑪溝3・井戸4・土坑2⑫⑬59
243. ①No.40②③④瓦⑤⑥⑦⑧土坑5⑨⑩土坑群⑪土坑群⑫⑬59
244. ①No.41②③④土坑15⑤土坑16⑥土坑30・井戸2⑦井戸2⑧土坑10⑨⑩土坑9⑪⑫山茶碗⑬59
245. ①No.42②③土坑45・48・緑釉④土坑群⑤⑥⑦土坑群⑧土坑24・31・墓・土釜⑨⑩⑪⑫⑬59
246. ①No.43②ピット③土坑④土坑群⑤土坑群⑥土坑群⑦土坑3⑧⑨井戸6・土坑39⑩⑪茶陶⑫⑬59
247. ①No.44②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩旧二条城・石垣・金箔瓦・石仏⑪⑫⑬59
248. ①No.45②③④⑤⑥⑦⑧⑨土坑・溝⑩溝⑪⑫⑬59
249. ①No.47②③④土坑群⑤土坑群⑥土坑群⑦土坑58・常滑埋甕⑧土坑3・4⑨井戸2・4⑩土坑5⑪⑫⑬59
250. ①No.48②③井戸2・1④⑤土坑2B⑥土坑2A・石鍋⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬59
251. ①No.49②土坑62③土坑23④土坑群⑤土坑⑥土坑13・瓦器⑦土坑群⑧土坑群⑨土坑3⑩井戸1⑪⑫⑬59
252. ①No.50②③井戸5④土坑10・38⑤土坑26⑥土坑54一括⑦⑧⑨土坑群⑩⑪土坑群⑫⑬59
253. ①No.51②③④土坑19⑤井戸6・石鍋・土坑26・山茶碗⑥⑦⑧建物・土坑15⑨土坑⑩井戸5⑪⑫⑬59
254. ①No.55②③④⑤溝1⑥土坑12⑦土坑3⑧⑨⑩⑪⑫⑬59
255. ①No.56②③④井戸6⑤井戸5⑥⑦土坑8⑧⑨土坑5⑩⑪⑫⑬59
256. ①No.57②③落ち込み④ピット⑤ピット⑥井戸13⑦土坑4⑧井戸12・滑石人面⑨土坑⑩⑪⑫⑬59
257. ①No.58②③④6条大路⑤土坑12⑥⑦土坑7・土師器多量⑧溝1⑨井戸11⑩井戸9⑪⑫⑬59
258. ①No.59②③④土坑群⑤土坑群⑥土坑13⑦⑧土坑群⑨溝1・備前⑩土坑1⑪土坑39⑫金箔瓦⑬59
259. ①No.60②溝1・緑釉③土坑④土坑⑤土坑7・土師器皿5枚重ね⑥土坑25⑦⑧土坑⑨土坑⑩⑪溝条1⑫⑬59
260. ①No.61②③ピット④井戸・楊梅小路⑤楊梅小路⑥楊梅小路⑦土坑2⑧井戸4⑨井戸5⑩⑪⑫青白磁合子⑬59
261. ①X-1②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩濠1・石垣・石仏⑪⑫旧二条城⑬59
262. ①X-4②③溝1～3・灰釉④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬59
263. ①立17②③越・緑釉合子・灰釉④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬59
264. ①立18②③④土坑4・井戸⑤土坑⑥土坑10埋甕⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬59
265. ①D24②③④包含層⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬59
266. ①D31②土坑③④⑤⑥⑦土坑⑧土坑⑨⑩⑪⑫⑬59
267. ①D33②③土坑④土坑1⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬59
268. ①D34②③④土坑⑤土坑⑥土坑⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬59
269. ①D23②③④⑤⑥⑦土坑⑧土坑⑨⑩⑪⑫⑬59
270. ①D27②③④⑤⑥⑦⑧土坑⑨土坑⑩⑪⑫⑬59
271. ①D28②③④⑤⑥⑦⑧土坑⑨土坑⑩⑪⑫⑬59
272. ①D32②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩大土坑⑪⑫⑬59
273. ①G22②③④⑤⑥⑦土坑1・土器溜⑧⑨⑩⑪⑫⑬59
274. ①G4②③④⑤⑥⑦⑧⑨土坑2・土器溜⑩⑪⑫⑬59
275. ①G2②③④⑤⑥包含層⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬59
276. ①G21②③④⑤⑥包含層⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬59
277. ①G24②③④⑤⑥包含層⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬59
278. ①No.62②③④土坑10⑤ピット4⑥ピット⑦⑧土坑5⑨溝1(濠)⑩土坑3⑪⑫⑬60
279. ①No.63②土坑17③ピット④井戸4・土坑群⑤井戸4⑥土坑19⑦⑧土坑2⑨土坑22⑩⑪⑫⑬60

-
198. ①西賀茂瓦窯跡②窯③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿
199. ①左京5条3坊15②③井戸B・C・D白磁四耳壺・瓦器④常滑埋め甕・墓または貯蔵⑤墓A・土坑A⑥墓B・土坑B・C・墓C⑦墓D⑧土坑D・E⑨井戸E⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿
200. ①大極殿跡②瓦③瓦④瓦⑤⑥⑦⑧⑨⑩土器⑪土器⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿
201. ①左京1条3坊9②③溝④土坑⑤⑥土坑⑦⑧土坑⑨土坑⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿
202. ①左京8条3坊2②溝・越③井戸④⑤井戸・ピット・褐釉壺・鑄型多数⑥井戸・ピット・四耳壺・瓦器・水注⑦ピット・火鉢・墓⑧ピット・平碗・瓦器茶釜・墓⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿
203. ①右京6条4坊9町・5条大路②③包含層④包含層⑤⑥⑦⑧⑨包含層⑩包含層⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿
204. ①右京5条2坊9町・10町②野寺小路・土器溜まり③井戸2・1④⑤耕作地⑥耕作地⑦耕作地⑧耕作地⑨⑩⑪⑫石鍋⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿
205. ①左京5条2坊16町②③土坑286④井戸310⑤包含層⑥土坑103⑦包含層⑧⑨⑩包含層⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿
206. ①左京5条1坊皇嘉門大路②皇嘉門大路③緑釉④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿
207. ①左京3条4坊4町②③築地・井戸28・土坑289④井戸12⑤土坑213⑥⑦⑧土坑130⑨井戸20・播磨鍋⑩溝11（3条大路または堀）⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿
208. ①左京8条3坊7町②③井戸346・347・415④⑤⑥井戸163・200・336・鑄型・集石墓64・漆器・埋甕⑦集石墓・埋甕⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿
209. ①左京6条3坊7町②③6条坊門小路④6条坊門小路・埴埦・井戸931・土坑461⑤6条坊門小路・土坑429⑥6条坊門小路⑦6条坊門小路・土坑78・239・土坑147墓⑧埴埦⑨6条坊門小路・井戸594・土坑219・鑄型多数⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿
210. ①No. 2②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩金箔瓦⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿
211. ①No. 3②③④⑤⑥⑦⑧土坑6・一括廃棄⑨⑩茶陶⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿
212. ①No. 4②③包含層④⑤⑥⑦土坑2⑧土坑2⑨土坑4⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿
213. ①No. 5②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩建物⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿
214. ①No. 6②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩ピット⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿
215. ①No. 7②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩ピット・溝⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿
216. ①No. 8②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩集石土坑⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿
217. ①No. 9②③④⑤⑥⑦⑧⑨溝⑩集石土坑⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿
218. ①No. 10②③④⑤⑥⑦溝7⑧⑨⑩溝4⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿
219. ①No. 11②③溝1④ピット⑤⑥⑦⑧ピット3⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿
220. ①No. 12②③④⑤⑥⑦⑧土坑2・集石・土釜⑨⑩土坑1⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿
221. ①No. 13②③④⑤⑥⑦⑧⑨石塔⑩溝1⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿
222. ①No. 14②③④⑤⑥包含層⑦⑧土坑⑨土坑⑩土坑⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿
223. ①No. 15②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩濠・旧二条城⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿
224. ①No. 16②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩金箔瓦⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿
225. ①No. 17②③④⑤⑥⑦⑧⑨溝⑩溝⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿
226. ①No. 18②包含層③④ピット⑤ピット⑥ピット・井戸⑦ピット⑧ピット⑨ピット・井戸⑩石列・井戸3⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿
227. ①No. 19②③④⑤⑥土坑7⑦⑧⑨溝2⑩金箔瓦⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿
228. ①No. 20②③④⑤⑥⑦⑧⑨濠⑩土坑3⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿
229. ①No. 21②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩漆器⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿
230. ①No. 22②③④⑤土坑8⑥土坑8⑦⑧⑨土坑2⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿
231. ①No. 23②③土坑11・6④⑤⑥⑦土坑群・墓⑧土坑群・墓⑨土坑群⑩ピット⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿
232. ①No. 24②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩濠・石塔⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿
233. ①No. 27②③④土坑3・4⑤⑥落ち込み2⑦⑧⑨⑩井戸5⑪土坑1⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿
234. ①No. 29②③④⑤⑥⑦⑧⑨ピット⑩土坑群・金箔瓦⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿
235. ①No. 31②③④⑤⑥⑦⑧⑨土坑7⑩土坑群⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿
236. ①No. 32②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩濠1・石垣⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿
-

160. ①聚楽第跡②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩堀⑪⑫⑬20
161. ①左京1条2坊10②③④⑤⑥土坑⑦土坑・石鍋⑧⑨土器⑩土器⑪⑫⑬21
162. ①東寺境内②③④建久盛り土・瓦器碗⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬22
163. ①烏丸町遺跡②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫流路⑬22
164. ①左京1条3坊2②③讃岐瓦・緑釉瓦④⑤⑥SK135磁州青釉⑦⑧西洞院大路⑨西洞院大路⑩⑪高級茶陶・羽口・埴塙・金箔瓦⑫⑬23
165. ①左京近衛②近衛大路・緑釉瓦③包含層・流路④流路⑤川⑥⑦⑧西洞院大路・3.4m幅の溝(堀)⑨SK149・堀⑩SX106墓・SE147・金箔瓦⑪華南三彩盤⑫構⑬24
166. ①左京北辺3坊1②土坑271③溝349・緑釉④溝349⑤⑥包含層⑦⑧⑨堀142・柵⑩⑪⑫室町時代の鉄製燭台⑬25
167. ①左京2条3坊②中御門大路③中御門大路④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪井戸⑫⑬25
168. ①右京4条2坊6②建物・井戸・緑釉③④耕作地⑤耕作地⑥耕作地⑦耕作地⑧耕作地⑨耕作地⑩⑪⑫三彩⑬25
169. ①右京5条1坊②③④⑤⑥⑦⑧⑨湿地状⑩包含層⑪⑫⑬25
170. ①烏羽離宮②③④磁州壺⑤溝190・山茶碗⑥溝244⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬26
171. ①右京7条1坊1②③SD23・灰釉陶器④SD1・牛馬の骨⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬27
172. ①右京9条1坊10②③SX279緑釉④木棺墓 SX121⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬27
173. ①久我東町遺跡②③④⑤⑥環濠建物群⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬27
174. ①伏見城下町②SD77③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩SK307⑪SK307⑫⑬27
175. ①左京北辺3坊4②③④⑤土坑⑥⑦⑧⑨⑩土師器皿大量⑪⑫⑬28
176. ①左京1条2坊15②包含層③④近衛大路⑤⑥土坑⑦瓦器壺埋納⑧⑨堀⑩⑪SE300⑫⑬28
177. ①左京4条2坊11②③④⑤⑥⑦流路⑧⑨幅2mの溝⑩⑪⑫⑬28
178. ①久我東町遺跡②③④⑤⑥建物⑦墓⑧⑨⑩⑪⑫⑬28
179. ①宮西限②SD67③SK61・P59④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬29
180. ①宮西限②③SD16④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬29
181. ①左京2条2坊10②③SX14⑤整地層⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫高陽院⑬30
182. ①左京5条2坊8②③井戸・轆轤土師器④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬31
183. ①左京4条3坊5②溝③SE21・越・灰釉・須恵器④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬32
184. ①六角堂②③④SD339⑤⑥⑦⑧⑨土器⑩⑪⑫⑬33
185. ①左京4条3坊13②包含層：8稜鏡；緑釉硯③井戸220・井戸531④井戸734：筆架山窯：磁杜窯：石鍋：東海系捏鉢⑤溝794：白磁四耳壺；井戸423漆器碗；白磁四耳壺⑥⑦SK611備前すり鉢⑧土坑⑨土坑⑩⑪⑫⑬34
186. ①法住寺殿跡②③④⑤⑥C18井戸⑦G3井戸火鉢：東海系捏鉢；石鍋；卸皿；磚仏；平碗⑧⑨⑩⑪⑫⑬35
187. ①左京3条3坊11②③SB65・SD83：SD98④井戸196⑤⑥SK70：室町墓多数白磁四耳壺⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬36
188. ①左京7条3坊5②③SE54④SE111⑤SE139瓦器碗⑥SX32墓⑦墓⑧墓；土釜⑨SD13⑩⑪⑫石鍋；青白磁合子⑬37
189. ①左京8条3坊2②流路③④紀井戸8⑤井戸9：石鍋；盤；井戸24鋳型⑥墓⑦墓⑧土坑102⑨⑩⑪⑫⑬38
190. ①左京6条2坊6町②③井戸5・6④⑤土坑2・山茶碗⑥井戸3⑦溝1・土坑1⑧⑨土坑2⑩⑪⑫⑬白磁四耳壺⑬39
191. ①高倉宮・曇華院跡第4次②③溝15④井戸12・山茶碗⑤土坑68・山茶碗・白磁四耳壺・溝7⑥土坑96⑦⑧溝1(堀)・土坑201・丹波甕⑨⑩⑪⑫瀬戸平碗⑬40
192. ①三条西殿跡②③3条大路・緑釉・越・白磁四耳壺④⑤小土坑群⑥烏丸小路・石鍋⑦⑧井戸42・土坑2・漆甕・漆器⑨三条大路⑩⑪⑫⑬41
193. ①高倉宮・曇華院跡②③④⑤井戸5⑥井戸4・褐釉⑦土坑58・64⑧土坑89⑨土坑88⑩土坑79⑪⑫⑬42
194. ①朝堂院跡②緑釉瓦③緑釉瓦④瓦⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬43
195. ①東洞院大路・曇華院跡②③灰釉陶器④⑤⑥常滑甕⑦常滑甕⑧土器⑨土器⑩⑪⑫⑬44
196. ①押小路殿②③井戸206・瓦器④井戸1⑤⑥井戸205⑦⑧土坑207・瀬戸卸皿⑨溝203⑩井戸7⑪焼土層・染付⑫⑬45
197. ①左京3条3坊11②③井戸11④⑤⑥土坑6⑦土坑12・土坑14備前甕⑧土坑5・備前甕⑨井戸4⑩井戸3⑪井戸2⑫酒屋？⑬

120. ①No. 4・5 ②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩町屋⑪町屋⑫⑬11
121. ①No. 11②③朱雀大路東溝④⑤⑥⑦⑧⑨耕作地⑩耕作地⑪⑫⑬11
122. ①NS 試掘②③溝 1 ④⑤⑥⑦⑧⑨耕作地⑩耕作地⑪⑫⑬11
123. ①No. 19②東京極大路③東京極大路④東京極大路⑤⑥土坑など⑦土坑など⑧土坑など⑨土坑など⑩⑪⑫⑬11
124. ①左京 4 条 4 坊 2 ②土馬・馬齒③溝320④溝326・井戸359⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪茶陶⑫石鍋・中世は少ない⑬11
125. ①左京 5 条 3 坊 8 ②③SE377、SK391祭祀土坑④SD216・鉄鍋⑤⑥SE143⑦⑧⑨SK57漆篋・刷毛、SK134雲母⑩方形竪穴⑪石組貯蔵庫⑫越・三彩・梅瓶⑬11
126. ①左京 5 条 4 坊 9 ②土坑124③建物④⑤⑥⑦⑧遺構少し⑨遺構増加⑩塀⑪⑫中世塀・一分金⑬11
127. ①左京 6 条 1 坊15②建物・SD747③④建物・井戸⑤⑥井戸・柱穴⑦⑧柱穴⑨SD33幅 3 m⑩⑪⑫緑釉唾壺⑬11
128. ①左京 6 条 3 坊 6 ②③慶滋保胤、井戸151④土坑⑤土坑⑥⑦⑧⑨多くが削平⑩⑪⑫⑬11
129. ①左京 6 条 3 坊 7 ②③ 6 条坊門小路④ 6 条坊門小路⑤⑥ 6 条坊門小路⑦⑧⑨ 6 条坊門小路⑩⑪⑫⑬11
130. ①左京 6 条 3 坊10②流路③池500・6 条坊門小路④道路拡張（小 6 条殿）⑤ 6 条坊門小路⑥ 6 条坊門小路⑦ 6 条坊門小路⑧町屋⑨濠⑩⑪⑫水銀⑬11
131. ①左京 7 条 3 坊 3 ②井戸・土坑疎ら③井戸・土坑疎ら④井戸・土坑疎ら⑤土器溜まり・埋め甕・建物⑥方形壇・埋め甕・砥石・土師器鉢・有孔磚⑦方形竪穴・仏具鋳型⑧仏具鋳型多量・礎石建物・埋め甕⑨空白⑩大型土坑⑪土蔵・鋳型土坑⑫⑬11
132. ①左京 8 条 3 坊16② 7 条大路③④SD300⑤⑥遺構少ない⑦遺構少ない⑧遺構少ない⑨遺構少ない⑩⑪⑫⑬11
133. ①左京 8 条 3 坊16②③ 7 条大路・井戸・宅地・緑釉香炉・長沙水柱④ 7 条大路・井戸・宅地⑤⑥石鍋・鋳型・埴塼・砥石・築地基礎・鋳造に必要な水溜め土坑・炭土坑⑦⑧⑨⑩⑪羽口・鋳型・土蔵・SK26⑫⑬11
134. ①左京 9 条 2 坊16②③④幅3.8m溝⑤⑥井戸⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬11
135. ①左京 9 条 2 坊15②③④SX57・多量焼土、柵・溝⑤包含層⑥井戸⑦井戸⑧⑨⑩⑪⑫土釜井戸⑬11
136. ①右京 5 条 2 坊10②建物・緑釉多い③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬11
137. ①右京 5 条 2 坊11②建物③④⑤⑥⑦⑧耕作地⑨耕作地⑩⑪⑫⑬11
138. ①右京 6 条 1 坊11②建物・井戸③④井戸⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫刻印部材⑬11
139. ①右京 6 条 3 坊 8 ②建物③耕作地④耕作地⑤耕作地⑥耕作地⑦耕作地⑧耕作地⑨耕作地⑩⑪⑫⑬11
140. ①右京 7 条 2 坊10②建物・井戸③耕作地④耕作地⑤耕作地⑥耕作地⑦耕作地⑧耕作地⑨耕作地⑩⑪⑫⑬11
141. ①右京 9 条 1 坊 2 ②流路③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬11
142. ①北野廃寺跡15②建物③④⑤⑥⑦⑧土坑・建物・塀⑨⑩⑪⑫⑬12
143. ①岩倉幡枝古窯跡群②瓦③④⑤⑥⑦⑧⑨窯・土器⑩⑪⑫⑬12
144. ①右京 5 条 3 坊 9 ②③④⑤⑥⑦⑧⑨幅2.3m溝・線刻粘板岩⑩⑪⑫西院城⑬13
145. ①左京 4 条 4 坊 7 ②③④⑤⑥土坑⑦⑧包含層⑨⑩⑪茶陶⑫⑬13
146. ①左京 6 条 4 坊 1 ②土坑③④⑤⑥土坑・瓦器釜（銅銭）⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬13
147. ①左京 3 条 4 坊13②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪茶陶大量⑫⑬14
148. ①左京 4 条 3 坊 8 ②③包含層④溝⑤土坑⑥⑦⑧⑨幅3.2m溝⑩⑪⑫⑬15
149. ①左京 4 条 2 坊10②③井戸・青白磁合子④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪塩壺⑫⑬16
150. ①左京 5 条 2 坊10②③④⑤⑥⑦水溜遺構・土師器大量⑧⑨⑩⑪⑫天目形瓦器⑬16
151. ①左京 9 条 1 坊15②③④包含層⑤包含層⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬16
152. ①左京 3 条 3 坊 7 ②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪包含層・煙管⑫⑬16
153. ①左京 4 条 4 坊 6 ②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪土坑・棹秤⑫⑬16
154. ①左京 4 条 4 坊 9 ②③④⑤⑥土坑⑦⑧土坑⑨⑩⑪茶陶・伊賀水指⑫⑬16
155. ①左京 5 条 4 坊 5 ②③④⑤土坑・褐釉壺・石鍋⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬16
156. ①左京 6 条 3 坊10②③④土坑⑤⑥⑦⑧包含層⑨⑩⑪⑫⑬16
157. ①右京 3 条 3 坊②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬17
158. ①右京 6 条 1 坊②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫石鍋⑬18
159. ①旧二条城跡②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩堀⑪⑫⑬19

79. ①左京3条2坊7 ②③建物④建物⑤建物⑥建物⑦建物⑧⑨建物⑩建物⑪⑫⑬9
80. ①左京3条3坊14②③溝④⑤⑥濠SD211幅7m⑦⑧⑨南北濠SD212⑩⑪⑫⑬9
81. ①左京4条1坊1 ②六角小路SD90・池・漆刷毛・越・水鳥型灰釉③井戸④六角小路・整地・吉州窯陶枕・漆鉢⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬9
82. ①左京5条4坊2 ②③溝④溝7・井戸・埋納・高麗青磁⑤⑥⑦井戸⑧井戸⑨濠⑩⑪⑫総構濠⑬9
83. ①左京9条2坊16-1 ②建物③④⑤溝⑥井戸⑦井戸⑧井戸⑨井戸⑩⑪⑫滑石製品⑬9
84. ①左京9条2坊16-2 ②③④SX121・吉備土器碗⑤建物・井戸・池? ⑥建物・井戸・池? ⑦建物・井戸・池? ⑧建物・井戸・池? ⑨建物・井戸・池? ⑩⑪⑫⑬9
85. ①左京9条4坊2 ②包含層③④⑤SE56著多数⑥流路⑦流路⑧流路⑨流路⑩⑪⑫⑬9
86. ①右京1条4坊5 ②SD6・緑釉③④中御門大路・邸宅・羽口⑤SD99⑥⑦⑧⑨耕作地⑩⑪⑫⑬9
87. ①右京4条1坊1・2 ②包含層③湿地④⑤⑥⑦⑧⑨⑩耕作地⑪⑫⑬9
88. ①右京6条1坊13・14 ②邸宅③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬9
89. ①白河北殿跡②③④池⑤池⑥池⑦池⑧⑨⑩⑪⑫⑬9
90. ①成勝寺跡②③井戸・SX234一括土師器皿④SD206・山茶碗⑤⑥⑦井戸⑧幅8mの堀⑨⑩⑪⑫長沙銅官壺・緑釉土塔⑬9
91. ①21区②包含層③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬10
92. ①22区②沼地③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬10
93. ①3区②③④流路⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬10
94. ①4区②③④流路⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬10
95. ①5区②邸宅③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬10
96. ①6区②木辻大路③木辻大路④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬10
97. ①7区②土器③恵止利小路④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬10
98. ①15区②溝・井戸③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫左馬寮⑬10
99. ①13区②③④流路⑤流路⑥溝⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬10
100. ①14区②③流路④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬10
101. ①10区②③④建物⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬10
102. ①9区②③建物④⑤⑥⑦⑧耕作地⑨⑩⑪⑫⑬10
103. ①11区②井戸・緑釉瓦③井戸④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬10
104. ①2区②③④湿地⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬10
105. ①左京2条3坊10②土器③溝・屋敷④溝・屋敷⑤⑥⑦⑧⑨⑩整地層・金箔瓦・石鍋⑪土蔵・骨加工⑫⑬10
106. ①No.25・24②築地③整地層④⑤⑥⑦⑧⑨⑩町屋⑪⑫緑釉瓦⑬10
107. ①No.10②大型建物③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩町屋⑪⑫緑釉瓦⑬10
108. ①左京3条3坊13②土器③井戸544・邸宅④土器⑤⑥⑦⑧池876・白磁山水画枕⑨堀833・池・石仏⑩堀833・池・石仏⑪屋敷・金箔土師器皿・漆工具⑫金座・越・長沙・磁州・高麗⑬10
109. ①左京6条1坊1 ②③朱雀大路東溝④⑤⑥SE78⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬10
110. ①左京9条2坊2 ③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩お土居堀・小型能面・銅将・木簡⑪⑫⑬10
111. ①右京2条4坊14②冷泉小路溝③④建物⑤耕作地⑥耕作地⑦耕作地⑧耕作地⑨耕作地⑩⑪⑫⑬10
112. ①右京6条1坊13②邸宅・越③耕作地④耕作地⑤耕作地⑥耕作地⑦耕作地⑧⑨⑩⑪⑫⑬10
113. ①最勝寺跡②③古墳の周濠④地業・溝⑤⑥耕作地⑦耕作地⑧耕作地⑨耕作地⑩⑪⑫後期古墳⑬10
114. ①鳥羽離宮跡②③整地層④⑤⑥⑦井戸⑧⑨⑩⑪⑫⑬10
115. ①焼場谷炭窯跡②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫7世紀の白炭窯⑬10
116. ①栗栖野瓦窯跡②落ち込み③④作業道・緑釉素地・白色土器(栗栖野様器)? ⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬10
117. ①栗栖野瓦窯跡②窯・二彩・緑釉瓦③④窯⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬10
118. ①植物園北②③埋納土坑④土坑⑤鉄滓⑥土坑⑦土坑⑧土坑⑨⑩⑪⑫奈良時代竪穴・まじない? ⑬10
119. ①宮西限②③溝④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬11

-
35. ①法住寺殿跡②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪井戸⑫⑬ 2
36. ①4条3坊11②③④⑤⑥井戸・水溜遺構・漆器多数⑦⑧土坑・炭大量⑨⑩⑪⑫⑬ 3
37. ①左京4条3坊16②③④⑤⑥⑦⑧土坑・木製品⑨濠・庖丁⑩⑪⑫⑬ 3
38. ①左京8条3坊9②③④溝・瓦器碗⑤溝⑥溝⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬ 3
39. ①左京8条3坊15②③④⑤⑥魚住鉢⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬ 3
40. ①法興院跡②③④鉄製品・砥石・土師器皿一括⑤東西溝⑥山茶碗⑦土坑一括⑧⑨⑩⑪⑫⑬ 3
41. ①珍皇寺旧境内②土坑・緑釉③④⑤⑥SE87SD5⑧⑨⑩⑪⑫⑬ 3
42. ①深草坊町遺跡②落ち込み③④溝⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬ 3
43. ①左京8条3坊3②井戸4③④⑤⑥土坑⑦土坑⑧⑨⑩⑪⑫⑬ 4
44. ①左京8条3坊6・11②③④井戸⑤土器⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬ 4
45. ①左京3条4坊②③④東京極大路⑤⑥⑦⑧⑨⑩落ち込み・唐津・大和釜・加工骨・骨細工?⑪⑫元禄「京独案内手引集」⑬ 5
46. ①栗栖野瓦窯跡②緑釉・瓦・釜③④⑤⑥⑦⑧⑨窯?⑩⑪⑫⑬ 5
47. ①右京3条2坊6②③包含層④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬ 5
48. ①左京4条4坊4坊②③④包含層⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬ 5
49. ①右京4条2坊②③包含層・鳥形積製品④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬ 5
50. ①右京5条3坊②③④⑤土坑⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬ 5
51. ①左京8条3坊②③④井戸⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬ 5
52. ①仁和寺院家跡②③④⑤⑥魚住鉢⑦⑧瓦器釜⑨⑩⑪⑫⑬ 5
53. ①右京1条2坊15②③④⑤⑥⑦⑧⑨包含層⑩⑪⑫⑬ 5
54. ①右京5条1坊11②湿地③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬ 5
55. ①右京6条1坊16②包含層③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬ 5
56. ①右京8条2坊8②池状遺構③④⑤⑥⑦⑧⑨包含層⑩⑪⑫⑬ 5
57. ①右京8条2坊11②湿地③湿地④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬ 5
58. ①右京9条1坊11②土坑③包含層④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬ 5
59. ①左京6条3坊7②③6条坊門小路④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬ 6
60. ①白河街区跡②③④井戸⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬ 6
61. ①成勝寺跡②③溝④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬ 6
62. ①鳥羽離宮跡②③④⑤井戸⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬ 6
63. ①内裏跡②③SK1・7・越・白色火舎・緑釉④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬ 7
64. ①左京2条3坊5②③町尻小路④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬ 7
65. ①左京5条3坊2②③④⑤⑥⑦土坑・火鉢多数⑧⑨⑩⑪⑫⑬ 7
66. ①左京3条4坊6②③④包含層⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬ 7
67. ①山科本願寺跡②③④⑤⑥⑦⑧⑨土坑⑩⑪⑫⑬ 7
68. ①左京4条4坊9②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪SK15茶陶多数⑫せと物丁⑬ 8
69. ①室町殿隣接地②SX52・53③④⑤⑥⑦⑧⑨SD31・33・34⑩⑪⑫⑬ 8
70. ①神泉苑西半部②③溝・緑釉瓦④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬ 9
71. ①神泉苑園池北縁部②③船着足場板④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬ 9
72. ①大宮大路②③溝④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬ 9
73. ①左京3条2坊5②大型建物・緑釉③小型建物④建物⑤建物⑥建物⑦空白⑧⑨建物⑩町屋⑪⑫⑬ 9
74. ①左京3条2坊7②建物③建物④建物⑤建物⑥建物⑦⑧⑨建物⑩建物⑪⑫⑬ 9
75. ①F No. 1②③④⑤⑥⑦⑧⑨堀⑩⑪⑫⑬ 9
76. ①F No. 3②③遣り水遺構④⑤土坑⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬ 9
77. ①F No. 4②③④井戸⑤土坑⑥土坑⑦土坑⑧土坑⑨⑩⑪⑫⑬ 9
78. ①F No. 7②③④⑤⑥土坑⑦土坑⑧土坑⑨⑩⑪⑫⑬ 9
-

京都市内調査地点データ

No. ①地点名 ②平安前期(9世紀) ③平安中期(10・11世紀) ④平安後期(12世紀) ⑤平安末鎌倉(13世紀前半) ⑥鎌倉後半(13世紀後半)
⑦南北朝(14世紀) ⑧室町前半(15世紀) ⑨室町後半(16世紀) ⑩桃山 ⑪江戸前期 ⑫備考 ⑬文献

1. ①中務省跡3 ②SB2・SK1・緑釉火舎③整地層④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬1
2. ①左京2条2坊10・高陽院1 ②③高陽院池築山④高陽院池、土師器皿多数⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫中世包含層⑬1
3. ①左京2条2坊12②2条大路北溝③築地・2条大路北溝・土器埋納坑④整地層・2条大路北溝・緑釉・青磁⑤整地層・2条大路北溝⑥⑦⑧⑨⑩⑪酒井家紋瓦、小札⑫⑬1
4. ①左京2条2坊15・高陽院2 ②③高陽院池④地業⑤SK46地鎮⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫中世ピット⑬1
5. ①左京3条3坊9 ②SE300③④SE270⑤⑥⑦⑧SE290⑨SE6⑩濠 SX66、唐津沓茶碗・黄瀬戸・天目・茶入れ・染付⑪高密度、町屋⑫⑬16・17世紀高密度⑬1
6. ①左京3条4坊②道路(富小路) ③道路(富小路)・井戸④道路(富小路)・井戸⑤⑥⑦⑧土坑13⑨濠・石組井戸・町屋⑩高級陶磁器多数、鑄造関連⑪陶磁器多数⑫⑬1
7. ①左京4条3坊10-1 ②③建物、井戸、邸宅④建物多数⑤井戸、地下蔵、溝⑥⑦⑧土坑、溝、井戸⑨大型の溝⑩不明⑪⑫⑬1
8. ①左京4条3坊13-2 ②井戸83③井戸81・溝4・陶枕④土器埋納295・井戸・溝・ピット⑤ピット215(疑似高台) ⑥ピット減少⑦⑧⑨石組井戸増加・濠⑩錦小路側溝⑪⑫⑬1
9. ①左京4条4坊5 ②③整地層④陶枕・長沙銅官⑤井戸・柱穴多数⑥⑦⑧⑨⑩茶陶多数⑪⑫⑬1
10. ①左京6条4坊1 ②③④溝・井戸⑤⑥⑦⑧⑨⑩陶器多量⑪⑫⑬1
11. ①左京9条2坊3 ②SD931③④⑤⑥⑦⑧土坑・道路・区画溝⑨土坑・道路・区画溝⑩⑪⑫⑬1
12. ①右京1条4坊13②③河川④以後湿地⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬1
13. ①右京2条4坊13・14②2条大路北溝③④冷泉小路北溝⑤⑥土器・陶磁器⑦耕作地⑧耕作地⑨耕作地⑩⑪⑫⑬1
14. ①右京3条1坊2 ②③3条坊門小路・緑釉瓦・円面硯③④3条坊門小路⑤⑥⑦耕作地⑧耕作地⑨耕作地⑩⑪⑫⑬1
15. ①右京3条2坊8-1 ②池③池④⑤耕作地⑥耕作地⑦耕作地⑧耕作地⑨耕作地⑩⑪⑫⑬1
16. ①右京3条2坊11・14-2 ②③3条坊門小路・宅地、越青磁・緑釉瓦④河川・護岸⑤河川・下駄・折敷・卒塔婆・頭蓋骨⑥⑦耕作地⑧耕作地⑨耕作地⑩⑪⑫⑬1
17. ①右京3条4坊2 ②建物③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬1
18. ①右京4条2坊2 ②井戸・建物・緑釉③包含層④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬1
19. ①右京6・7条1坊12②6条大路・木簡③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬1
20. ①右京6条1坊12・13②邸宅③④⑤溝⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬1
21. ①右京6条3坊4 ②建物・埋納土坑 SK188③④⑤⑥耕作地⑦耕作地⑧耕作地⑨耕作地⑩⑪⑫⑬1
22. ①右京6条4坊2・西京極遺跡②③東西溝 SD33④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬1
23. ①右京7条4坊9 ②建物・地鎮③④包含層⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬1
24. ①右京8条2坊1・西市跡②流路③7条大路④土坑24⑤⑥建物・鉄滓?⑦建物・鉄滓?⑧建物・鉄滓?⑨建物・鉄滓?⑩⑪⑫⑬1
25. ①尊勝寺跡②③④⑤瓦溜め・SK12⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬1
26. ①鳥羽離宮134②③④池・経石・仏像・羯磨文丸瓦⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬1
27. ①鳥羽離宮135-2②流路③④⑤溝1・建仁3年木簡⑥溝1・瓦器碗・漆器碗⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬1
28. ①羽師志水町遺跡②③④⑤館・白磁四耳壺⑥常滑3筋壺⑦⑧瀬戸灰釉平碗⑨館・墓⑩墓⑪墓⑫⑬1
29. ①南ノ庄田瓦窯跡②③④⑤瓦窯・建物⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬1
30. ①室町殿跡②③④⑤⑥⑦⑧室町殿庭・溝⑨室町殿庭・溝⑩?列建物⑪⑫⑬1
31. ①北野廃寺跡②③土坑④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬1
32. ①左京6条3坊7 ②③6条坊門小路④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬2
33. ①仁和寺院家跡②③④井戸・池・邸宅⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬2
34. ①六波羅政庁跡②③④溝・漆器碗⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬2

Between Urban and Rural Communities: Centering around Kyoto in the Middle Ages

SUKIGARA Toshio

One of the themes of the studies on medieval urban community sites is to explain the social structure of each age and its changing process from the spatial structure of a historical site reconstructed with ancient structural foundations and remains. Since archaeological materials found in Kyoto are extremely vast in quantity, the scholars including the author of this paper, in spite of virtual examination as a whole, have scarcely examined the specific characteristics of each site which are essential for reconstructing the spatial structure of the site.

This paper gives attention to the above point, and aims to clarify what is found when and where, in terms of medieval structural foundations and remains in Kyoto, and to verify their meanings to Kyoto as a whole. For that purpose, the author in the first chapter takes up *hajiki* plates generally called “*kawarake*” of Kyoto type, and by considering their circulation he tries to reconstruct the fringe of strong influencing power that medieval Kyoto possessed. In the second chapter, the author spotlights Sanjo and southward and examines the meaning of roles which various sites of the urban community preformed from the standpoint of the spatial structure.

In the first chapter, the background of circulation of *kawarake* bowls beside *hajiki* plates to western Japan is tried to be explained with the relation between Iwashimizu-Hachimangu and Usagu-Mirokuji, and the background of *hajiki* plates of Kyoto type which were spread in the early medieval ages to eastern Japan is considered with Hie-Sannogu and Hakusansha. In the second chapter, the research sites around the present Kyoto station are minutely analyzed, and Shichijo area is re-evaluated with the background of *samurai* families, Hachijo-Nyoin and Toji (East Temple) that were in the center of politics then. And the strong influence of Tofukuji can be seen from the distribution of stone pans frequently found in southern Kyoto.

This paper tries to consider various aspects of medieval Kyoto from an archaeological point of view; for that purpose, it focuses on lower Kyoto, and its characteristics are relieved in the relation with other districts. As a result, it makes us recognize the religious side which united Kyoto and other districts, or an important role played by temples and shrines. In the future, the urban structure and characteristics of the whole town including upper Kyoto will be considered from the same standpoint.